都城市文化財調査報告書

第 2 集

祝吉遺跡

1982年

都城市教育委員会

序

昨年度に引きつづき実施しました祝吉遺跡の発掘調査の結果を、本市文化財調査報告書第２集として刊行することになりました。

この調査は宮崎県教育委員会のご指導と多大のご協力によって行なったものでありますが、特に調査の計画、実施、整備、更に調査書の作成に献身的に従事していただいた県教育庁文化課の面高哲郎主事に負う処が大変大きく、あわせて喪心より謝意を表します。

また、前回同様積極的にご協力いただきました高橋正利祝吉自治公民館長ほかの地元のかたがた、また種々ご配慮いただいた都城市の関係部課に対しても心からお礼を申しあげて序とします。

昭和５７年３月１日

都城市教育長　　刀　坂　守　信

例　　言

1，本書は、祝吉・郡元土地区画整理事業に伴ない、都城市教育委員会が実施した祝吉（いわよし）遺跡の発掘調査概報である。

2，発掘調査は、昭和５６年9月２１日から同年１１月１５日まで実施した。

3，調査関係者は次の通りである。

調査主体

都城市教育委員会

教育長	刀坂守信
教育次長	井之前尚
図書館長	北郷昭二
図書館長補佐	松下義弘
文化財担当	遠矢昭夫
調査員	面高哲郎（県教育庁文化課主事）
宮崎県文化財保護指導委員	児玉三郎

4，祝吉遺跡の出土遺物は、都城市立郷土館に保存、展示される。

5，遺物整理にあたり、輸入陶磁器については、亀井明徳氏（九州歴史資料館）の、石器の石材同定については、宮脇繁氏（宮崎県総合博物館）の助言をいただいた。

6，住居内出土の炭化材の樹種識別は、宮崎大学農学部大塚誠講師に委嘱した。

7，本報告の実測は、岩永哲夫、面高哲郎、北郷泰道、永友良典、山中悦雄、菅付和樹で行ない、トレースは面高山中が行った。執筆、編集は面高があたった。

本　文　目　次

第１，序　　説 …… 1

1.　はじめに …… 1

2.　調査の経過 …… 1

第２，遺跡の位置 …… 2

第３，調査の概要 …… 4

1.　縄文時代の遺物 …… 4

2.　弥生時代の遺構と遺物 …… 4

遺　　構 …… 4

⑴第６号住居跡 …… 4

⑵第７号住居跡 …… 7

⑶第９号住居跡 …… 9

⑷第10号住居跡 …… １０

⑸第13号住居跡 …… １２

遺　　物 …… １３

⑴第７号住居跡出土遺物 …… １３

⑵第10号住居跡出土遺物 …… １７

⑶第13号住居跡出土遺物 …… １９

⑷その他住居跡出土遺物 …… １９

3.　中世の遺構と遺物 …… ２２

遺　　構 …… 22
遺　　物 …… 23
第4，結　　語 …… 23

挿　図　目　次

第１図　遺跡の所在地 …… 3
第２図　遺構分布図 …… 5
第３図　第６号竪穴住居跡実測図 …… 6
第４図　第７号竪穴住居跡実測図 …… 8
第５図　第９号竪穴住居跡実測図 …… 9
第６図　第10号竪穴住居跡実測図 …… １１
第７図　第13号竪穴住居跡実測図 …… １２
第８図　第７号竪穴住居跡出土遺物 …… １４
第９図　第７号竪穴住居跡出土遺物 …… １５
第10図　第７、10号竪穴住居跡出土遺物 …… １６
第11図　第７号竪穴住居跡出土遺物 …… １７
第12図　第10号竪穴住居跡出土遺物 …… １８
第13図　第13号竪穴住居跡出土遺物及び縄文土器 …… ２０
第14図　第11、12号竪穴住居跡出土遺物 …… ２１
第15図　第１号竪穴住居跡出土遺物 …… ２２
第16図　溝状遺構断面図 …… ２２

図　版　目　次

図版１.　⑴溝状遺構
⑵溝状遺構Ｄ溝と第４号竪穴住居跡

図版 2.　⑴第 1 、 2 号竪穴住居跡

⑵第 5 号竪穴住居跡

図版 3.　⑴第 6 号竪穴住居跡

⑵第 9 号竪穴住居跡

図版 4.　⑴第 7 号竪穴住居跡

⑵第 7 号竪穴住居跡遺構

図版 5.　⑴第 7 号竪穴住居跡貯蔵蔵穴

⑵第 7 号竪穴住居跡遺物出土状況

図版 6.　⑴第10号竪穴住居跡

⑵第10号竪穴住居跡遺物出土状況

図版 7.　⑴第　・　区遠景

⑵第11号竪穴住居跡貯蔵穴

図版 8.　祝吉遺跡出土縄文土器・第13号竪穴住居出土遺物

図版 9.　第 7 号竪穴住居跡出土遺物

図版10.　第 7 号竪穴住居跡出土遺物

図版11.　第11号竪穴住居跡出土遺物

図版12.　第 1 、11号竪穴住居跡出土遺物

図版13.　第12号竪穴住居跡出土遺物

図版14.　祝吉遺跡出土中世遺物

第Ⅰ章　序　説

1．はじめに

祝吉遺跡は、昭和５５年９月、都城市区画整理課が行っている祝吉、郡元土地区画整理事業の工事中発言された遺跡である。都城市教育委員会では、昭和５５年９月２４日から１０月１７日まで昭和５５年度事業区の発掘調査を行い、弥生終末期の竪穴住居跡７、中世の住居跡及び溝状遺構が発見されている。

昭和５５年調査された地区の東５０ｍの昭和５６年度工事予定地において、道路取り付けのため掘削されている法面々において竪穴住居らしい落ち込みが、発掘調査時に確認されていた。祝吉、郡元土地区画整理事業は、区画整理を行うと同時に火山噴出物である御池ボラ層（約１ｍの厚さがある。）を徐去し、耕地改良を行うものである。市教育委員会では、昭和５５年９月確認されていた遺構の取り扱いについて区画整理課と協議を行ったが、工事遂行上現状保存が困難であったので、事前に発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、都城市教育委員会が主体者となり、県文化課主事面高哲郎の担当で昭和５６年９月２１日から同年１１月１５日まで実施した。

2．調査の経過

祝吉、郡元土地区画整理事業は、昭和５　年より実施されており、昨年度までに今回調査対象地の西隣まで工事は終了していた。本年度の工事は、既に６月より実施されており、調査対象地は、微高地状に、東西３０ｍ、南北９０ｍが残されており、その西縁の法面で昨年住居址らしい落ち込みが確認されている。調査対象地の南２００ｍの工事区内でも土器片が散布していたことにより、祝吉遺跡は広範囲にわたるものと予想される。

調査対象面積は約２７００㎡であったが、排土置場の関係等で完掘しえたのは、約１８００㎡である。

調査は、対象地の中軸線（Ａ－Ｂ、Ｃ－Ｄ）によって４区に分け、北西より右回りにⅠ、Ⅱ、……　区と呼称する。重機による表土剥ぎの前に中軸線線上で包含層確認のため0.5ｍ×２ｍの試掘溝を入れる。第１次調査の際確認されている遺物包含層である御池ボラ層上の黒色土（ボラを若干含む）は、厚さ３０㎝前後あり、黒色土層において遺構らしい落ち込みも存在したことから、遺構の残存度は良好と予想された。

重機による表土剥ぎ後、弥生時代の竪穴住居跡、中世の溝状遺構及び柱穴群がⅠ、Ⅳ区で明瞭

に確認され、Ⅱ、Ⅲ区では土質のため遺構プランの確認は困難であったが、整地の結果、調査区全域に弥生時代の遺構が、北半には中世の遺構が存在することが確認された。

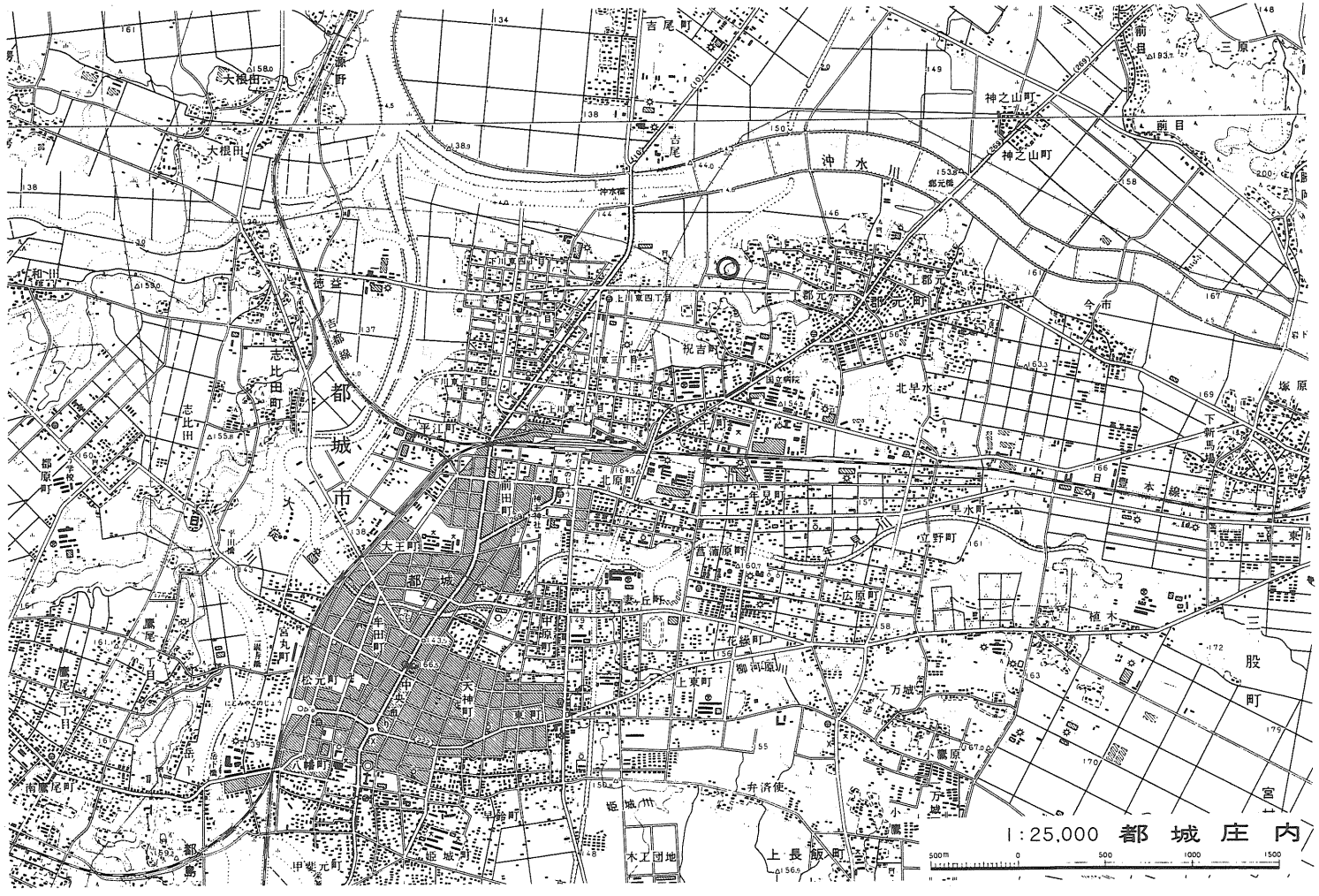
第２次の調査では、弥生時代の竪穴住居跡、13（十１）、中世の溝状遺構及び多数の柱穴等が検出され、祝吉遺跡では、竪穴住居跡が第１次の７軒を含め２０軒が発見されたことになる。発掘調査は、頭初、１０月９日までの２０日間の予定であったが、遺跡の重要性を鑑み、区画整理課へ調査期間の延長を申し入れる。協議の結果、１７日間の期間延長が行われ、９月２１日より実施された調査は、最終的に１１月１５日に終了した。

遺跡は、調査終了後、１ｍほど削平され、現在畑地として利用されている。

第Ⅱ章　遺跡の位置（第１図）

祝吉遺跡は、都城市祝吉町に所在し、今回調査を実施したのは、祝吉町５７０２、５７０３、５７０７、５１０８番地である。

都城盆地中央部には、流路を北にとる大淀川が貫流している。その西岸、霧島山系東裾には成層シラス、東岸の鰐塚山地西裾には扇状地が広がり、特に盆地東南部に発達する。この扇状地上に都城市街地はある。祝吉遺跡は、市街地の北、扇状地北縁に位置する。この付近は、大淀川支流である沖水川により侵飾を受け低位河岸段丘状となっており、標高約１５０ｍ、沖水川流域に発達する沖積地との比高差は約10ｍである。遺跡北の段丘縁には、伏流水の湧き出る所があり、同様な所は扇状地上に各所あり、泉等が形成されている。扇状地上は、遺跡の立地のための好条件を備えているといえよう。


1:25,000 都城庄内
500m 0 500 1000 1500
都城市
沖水川
大根田
吉尾町
神之山町
前目
三原
志比田町
都原町
大王町
牛田町
中央通り
天神町
松元町
八幡町
早鈴町
姫城川
木工団地
上長飯町
弁済使
小鷹
万城
鷹原
鷹尾
南鷹尾町
甲斐元町
都島
宮丸町
上東四丁目
上東三丁目
上東二丁目
上東一丁目
祝吉町
国立病院
北早水
今市
上都元
都元町
塚原
下新馬場
日豊本線
早水町
立野町
植木
股町
宮丸
北原町
牛見町
蒲生原町
妻丘町
甲原町
広原町
花線町
畑間原川
上東町
平川町
前田町
神社
徳蓋
吉編線
和田
沖水橋
都元橋
前目
三原

第1図　遺跡の所在地（○印）

第Ⅲ章　　調査の概要

第２次調査で検出された遺構は、弥生終末期の竪穴住居１３、中世の溝状遺構５及び多数の柱穴である。(第２図)遺構は検出されていないが、縄文土器片も数点出土している。

弥生時代の竪穴住居跡はⅠ、Ⅱ区で７軒、Ⅲ、Ⅳ区で６軒の計１３軒である。住居跡の平面プランは、方形を基本とし１辺４～６ *m*であるが、７号住居跡のように１辺が約８ *m*にも及ぶ大型住居跡もある。内部施設としては、間仕切り的機能をもつ突出部、ベッド状遺構、貯蔵穴等をもつ。１３軒の中で、１号と２号は、道路建設等により西半が失われ、３号と４号は、中世の溝により切断されていた。６号は、多量の排土下に位置していたため完掘まで至らなかった。第Ⅲ区北西隅の中世溝により一部破損する１辺２ *m*の落ち込みからは、弥生終末期の土器片が出土していることなので、ベッド状遺構をもつ住居跡の中央床面であった可能性がある。

中世の溝は調査区北半で５条発見されている。東よりＡ，Ｂ，……と呼称することにする。検出された溝の形態は、Ａ，Ｂ溝がＵ字形、Ｃ，Ｄ溝がＶ字形となっており、Ａ，Ｄ溝はＬ字状に走行し、東及び北へ延びている。第Ⅲ区、第９号住居跡の北には、炭化材が径 2.5 *m*の範囲に平面的に拡がる部分が１ケ所あり、糸切りの土師器皿を共伴していたことから、中世の溝とほぼ同時期のものと考えられる。

１．縄文時代の遺物（第１３図）

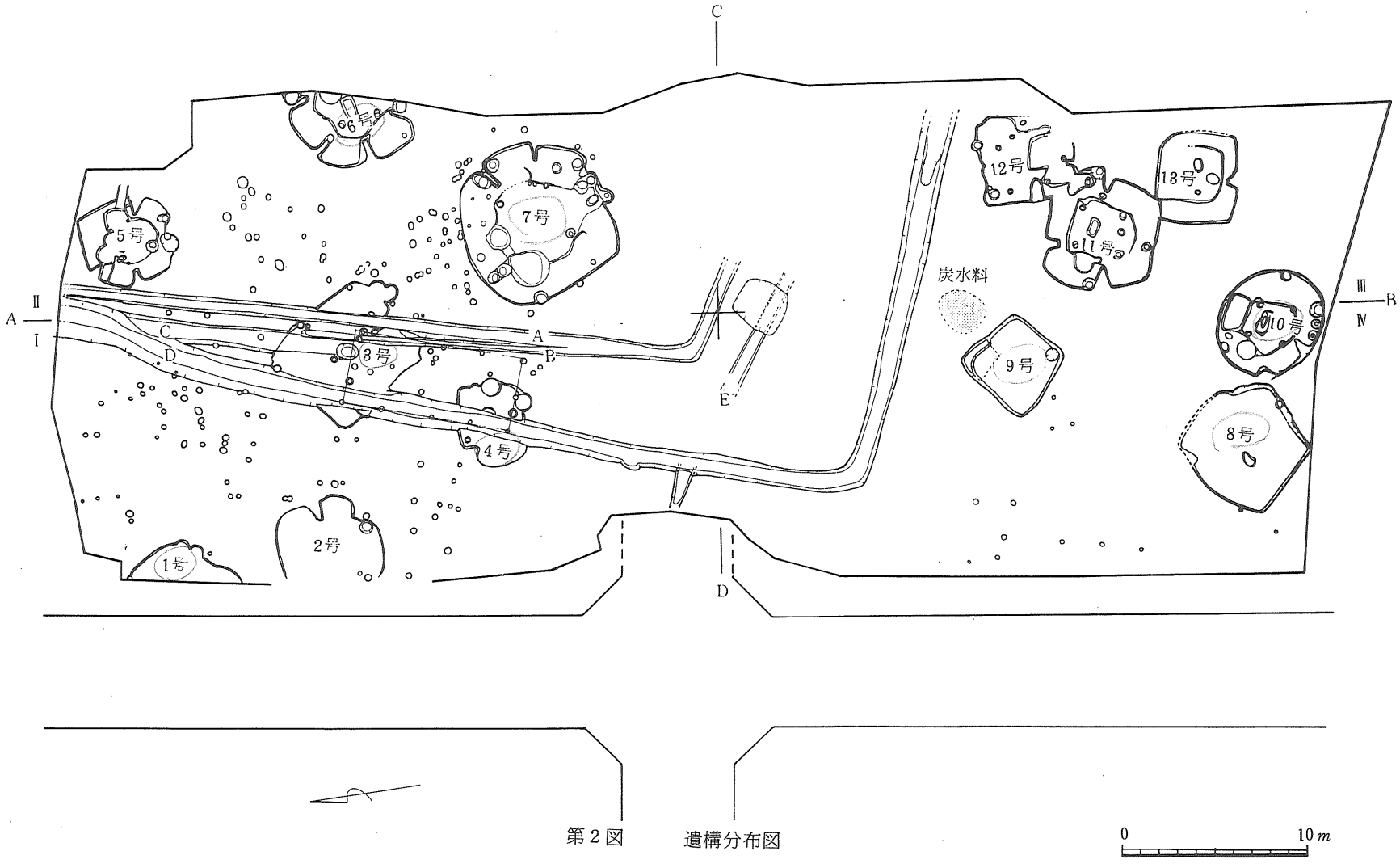
縄文時代の遺構は検出されていないが、調査第Ⅰ、Ⅱ区において、縄文土器片が数点出土している。９は、凸帯をもつ口縁部である。凸帯上にはヘラ様工具により上あるいは下方向より縦位の短沈線文があり、凸帯直下には横走する沈線文がある。口唇部には、指頭による押圧がみられる。１０～１２は胴部片である。貝殻条痕文を地文とし、横走あるいは斜走する沈線文がヘラ様工具によって、わりに深く施文されている。９～１２はいずれも赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成はよい。

２．弥生時代の遺構と遺物

遺　　構

（１）　第６号住居跡　（第３図）

Ⅱ区の東縁で発見された住居跡である。排土置場の関係で調査しえたのは２分の１であるが、１辺約５ *m*のと考えられる隅丸方形プランで胴のやや膨む竪穴住居跡である。壁は約４０ *cm*が残されている。突出部は各辺にあり、４ケ所もつ。突出部は、４０～５０ *cm*の幅で約 1.2 *m*延びて

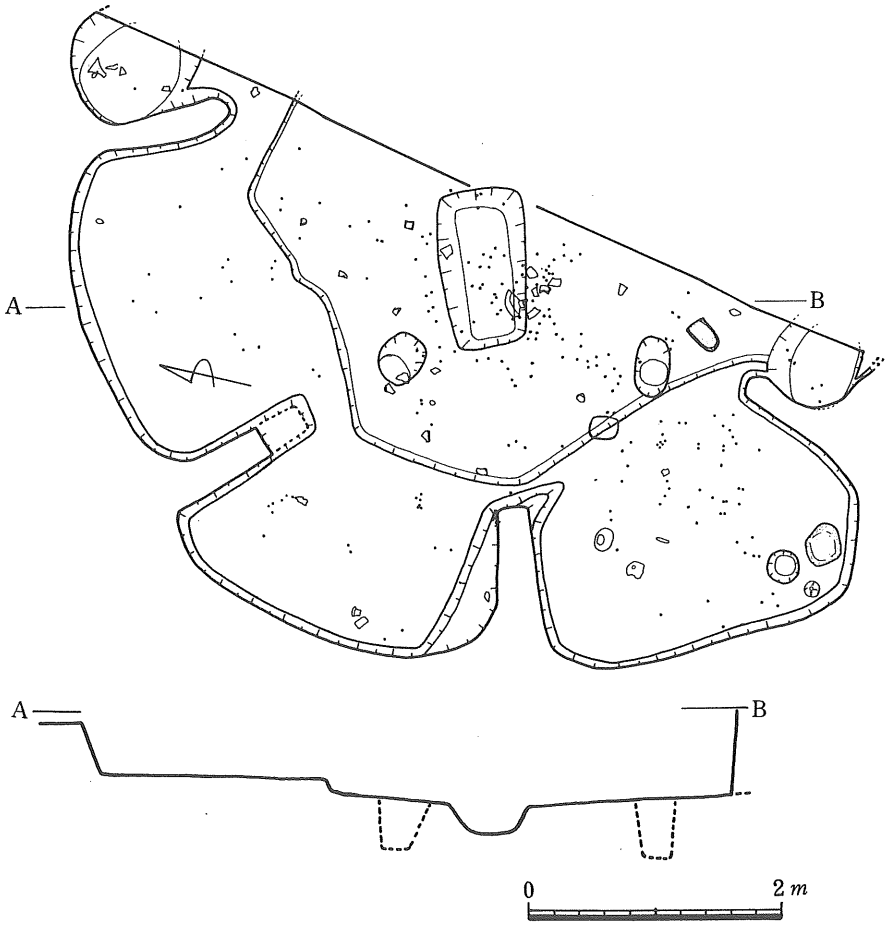


第２図　遺構分布図

0　10 m

おり、突出間は約1.5～2.2 *m*である。ベッド状遺構は全周しており、その幅は1.5～2.0 *m*あるが、突出部はベット状遺構縁までは延びていない。中央床面の平面プランは、2分の1の調査のため全様は明らかでないが、突出部付近で折れている。柱穴は2ケ所確認されている。中央床面のほぼ中央部に60 *cm*×125 *cm*の長方形プランの落ち込みがあるが、焼土等は確認されていない。貯蔵穴は2ケ所検出されており、いずれも突出部のつけ根の部分に位置している。北の貯蔵穴は径約1 *m*、深さは46 *cm*を測り、底付近で高杯の脚部等が出土している。南の貯蔵穴は径約70 *cm*、深さ40 *cm*を測る。

出土遺物は、土器中心で中央床面中央部に集中するが、打ちグワ片かと思われる鉄器等も出土している。突出部で区画された南のベッド状遺構においては、その床面にほぼ直立して、口縁部を欠損する壷、受部を欠損する器台の脚や、扁平に近い河原石などが出土している。



第3図　第6号竪穴住居跡実測図

（２）　第７号住居跡　（第４図）

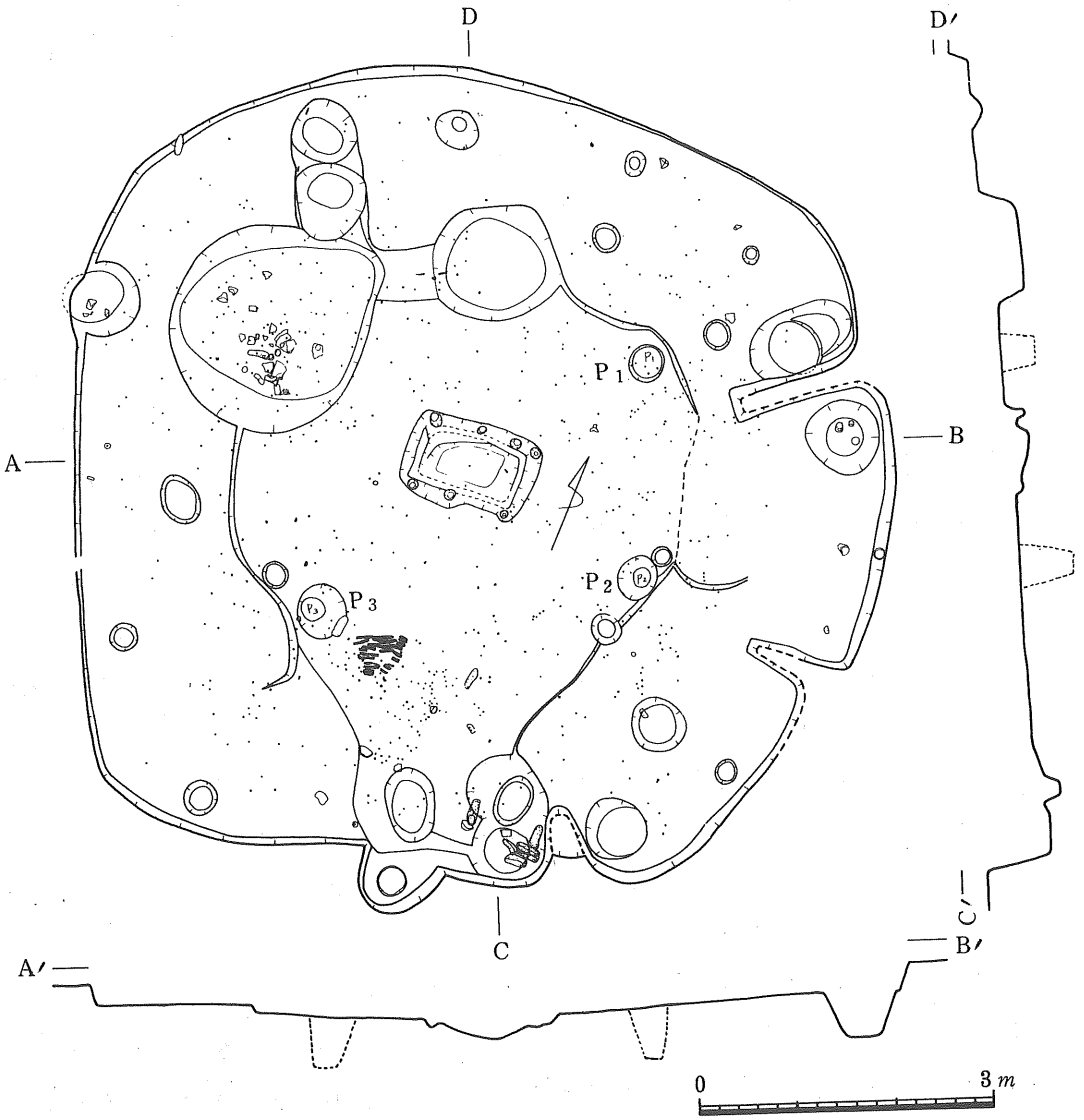
第Ⅱ区の南に位置し、最大規模を有する竪穴住居である。西辺及び南辺は直線的に延び、北辺及び東辺は膨む、扁隅丸方形プランをなす。規模は中軸線東西8.25m、南北8.10 を測り、壁は２０cm残されている。突出部は、東辺から南辺にかけて３ケ所あり、幅は３５～６０cmで１～1.5 m延びている。突出間は、約2.3 mである。ベッド状遺構は、1.5 mから２ mの幅をもって四周を巡っているが、南辺において一部切れており、U字形を呈している。高さ約１０cmであるベッド状遺構の切れている南壁には、幅1.9 cmで外へ最大６０cm張り出し部があり、径４０cm前後のピットが４ケ所近接している。ベッド状遺構切断部から北へ1.2 mにかけては、粘土が一面検出されている。その上部に径２cmの炭化材がほぼ東西方向に並んでいた。

中央床面は、五角形を呈するが、その中央部に８５cm×１３０cmを測る長方形プランの落ち込みがある。落ち込みには、幅１５cm前後の周溝が巡り、周溝中には径約１０cmの小ピットがあり、南辺に３ケ所、北辺に４ケ所が検出されている。この小ピットは、何か立てていたようでもあり、７号住居跡内で、長さ２５cm、厚さ５cm前後の河原石が１０個近く出土しているが、これが小ピットと関係あるかないかについては今後の検討を要する。

貯蔵穴は、東辺の突出部のつけ根で３ケ所、西壁で１ケ所確認されている。遺物を伴う貯蔵穴は２ケ所あり、特に東辺の北突出部南で確認された貯蔵穴からは、小型土器等が直立して出土している。西壁の貯蔵穴からは床面付近で長頸壷の頸部が出土している。住居内北、ベット状遺構上には、２ケ所の不正円形プランの竪穴があり、１つは径2.5 m、深さ３０～４０cm、１つは径1.2 m、深さ約２０cmを測る。西の竪穴からは、壷、高坏、手捏ね土器等が出土している。

ピットは、ベッド状遺構上、中央床面で検出されているが、第７号住居跡に伴う主柱穴はＰ１～Ｐ３と考えられる。いずれも径４０cm前後で深さは３０～５０cmである。ベッド状遺構上に位置する径２０cm前後のピットは深さが最大２０cmで、中世のものと考えられる。

出土遺物は、土器、石器、鉄器等で住居内全域より出土しているが、特に中央床面南部に集中する。出土遺物の中で注目されるのは、多くの完形の石包丁、手捏ね土器、底部に貫通孔のある土器等の出土である。石包丁は、中央床面南部及び東辺ベッド状遺構上のほぼ床面において出土している。底部に貫通孔のある土器は２点出土しており、１は、径9.1 cmの鉢形土器、１つは手捏ね土器である。前者は東壁際北よりでほぼ直立して、後者は南よりの西壁近くで倒立して出土している。



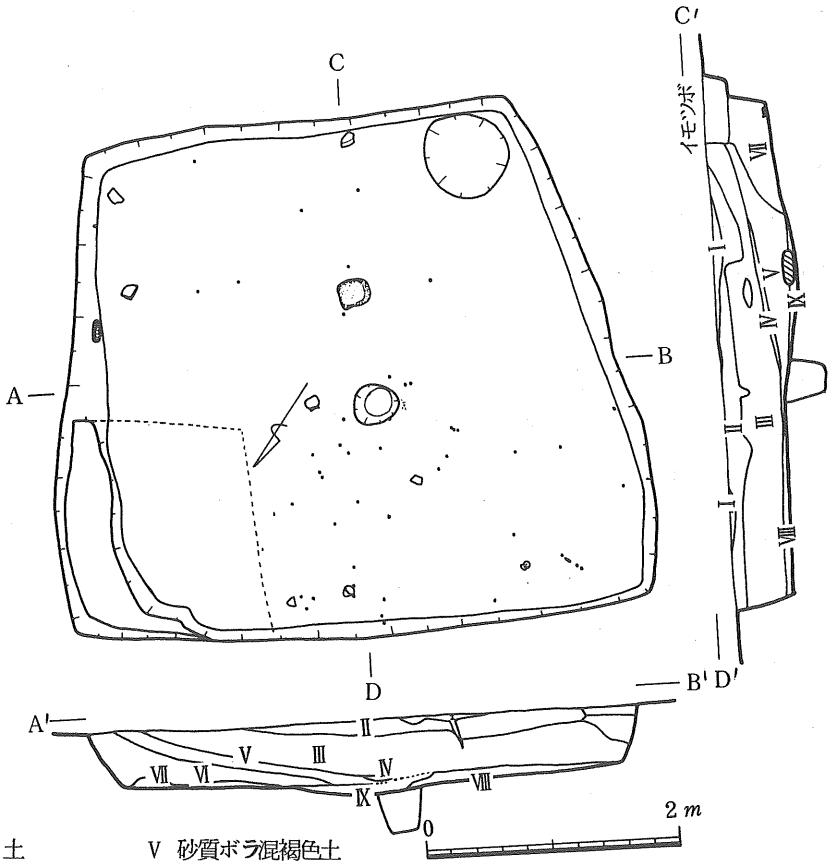
第4図　第7号竪穴住居跡実測図

（３）　第９号住居跡　（第５図）

第Ⅳ区中ほどに位置する梯形をなす住居跡である。９号は、北辺4.5 *m*、東辺3.２５ *m*、南辺3.３５ *m*、西辺4.1 *m*を測る規模の小さい住居跡で突出部はない。柱穴は、中央やや西よりに１ケ所ある。床面中央部には、緩かな傾斜をもつ落ち込みがあるが焼土はない。南隅には、径６５ *cm*、深さ２５ *cm*の竪穴があり、これは貯蔵穴とも考えられる。

９号住居跡では、貼床と考えられるものも確認されているが、北隅においては、祝吉遺跡のベッド状遺構が削り出しであるのに対して、貼床によるベッド状遺構らしいものも検出されている。

出土遺物は、その量は少ないが、住居内中央部を中心において、床面などから小型の鉢等が出土している。



Ⅰ　耕土
Ⅱ　ボラ混黒色土
Ⅲ　ボラ混褐色土
Ⅳ　砂層
Ⅴ　砂質ボラ混褐色土
Ⅵ　ボラ混黒色土
Ⅶ　ボラ混褐色土(やや硬質)
Ⅷ　ボラ混褐色土(床面)
Ⅸ　ボラ混黒褐色土

第５図　第９号竪穴住居跡実測図

（４）　第１０号住居跡　（第６図）

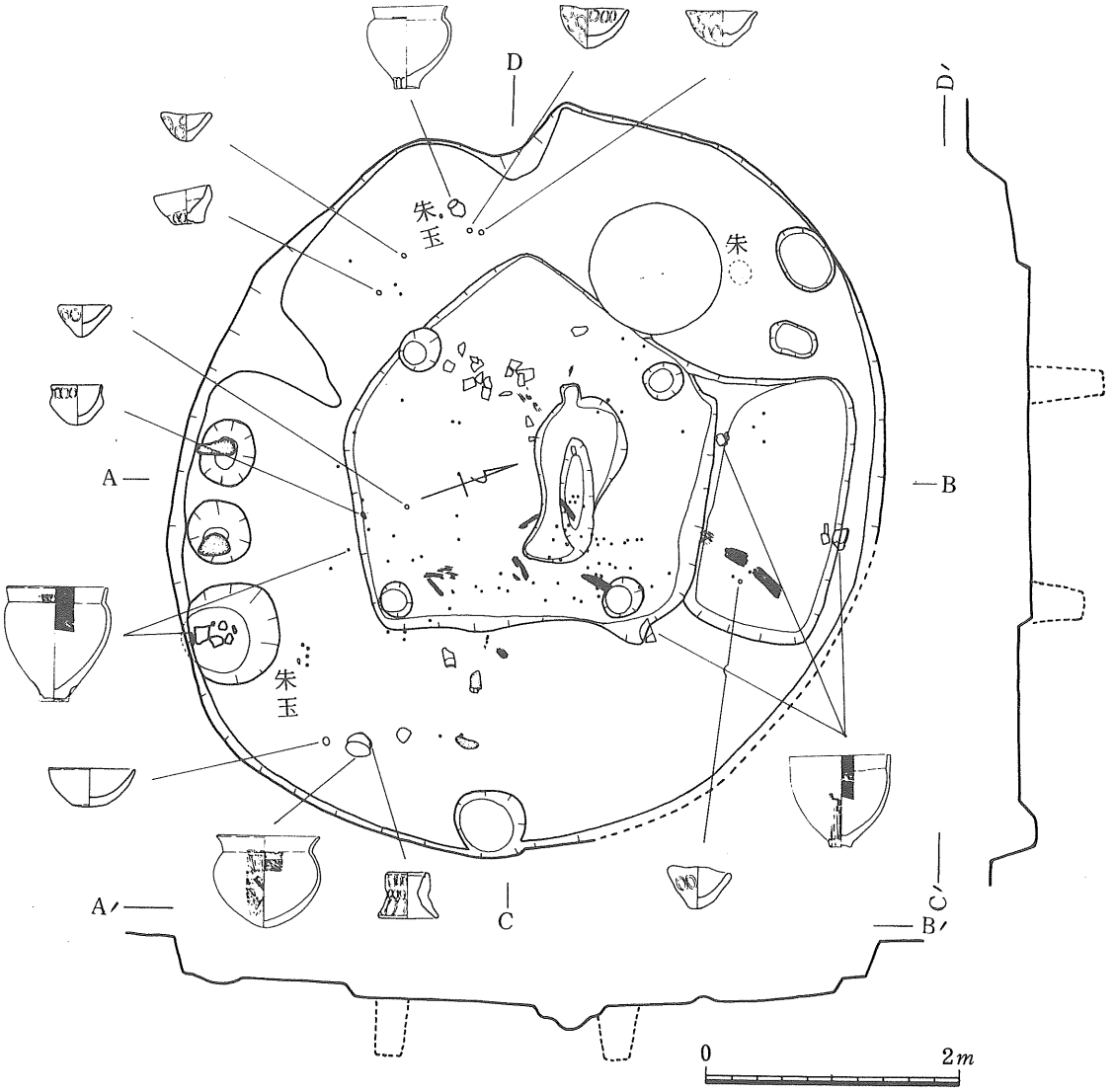
調査区の南端で検出された住居跡である。平面プランは楕円形で、長径6.0 *m*、短径5.1 *m*の規模をもち、間仕切り的機能をもつ突出部が２ケ所ある。壁高は３０～４０*cm*が残されている。住居内には、ベット状遺構が1.2 *m*から1.7 *m*の幅をもって巡っており、ベット状遺構の床面は、中央床面より約１０*cm*高くなっている。中央床面は五角形をなし、その中央部には、長辺１３５*cm*、短辺５０*cm*、深さ約３０*cm*が計測される二段掘りの不正隅丸長方形の落ち込みがある。この落ち込みから焼土は検出されていない。中央床面の隅ないし際では４個のピットが検出されている。ピットは径約３０*cm*、深さ４０～６０*cm*あり、ピット間は１８０～１９０*cm*が計測される。４個のピットは、住居の主柱穴と考えられる。

住居内西にある２ケ所の突出部は、それぞれ約５０*cm*ないし９０*cm*の長さであり、突出間は約２*m*である。この突出部によって、ベッド状遺構が区画され、一空間が設定されている。この区画された部分のほぼ床面において、倒伏した朱のはいる小型甕形土器や、径４*cm*前後の手捏ね土器が４個、直立して検出され、また、朱塗りの土器片や朱玉様のものが出土している。

中央床面西半においては、朱塗りの大型壷片も出土している。

突出部の東の壁際には、竪穴が３ケ所並んでいる。西端の竪穴は、長径５２*cm*、短径４２*cm*、深さ１５*cm*である。その中央には、長さ４０*cm*、最大幅１２*cm*、厚さ５*cm*の扁平な河原石が壁へよりかかる状態で検出されたが、この河原石は本来竪穴に立てられていたものと考えられた。真中の竪穴は、径約５０*cm*、深さ１２*cm*で１個の河原石がある。東端の壁穴は、径約８０*cm*、深さ３７*cm*あり、わずかに壁下へはいる袋状となっている。床面からススの付着する甕形土器が出土している。この他、東壁においても径約５５*cm*、深さ２１*cm*の竪穴が検出されている。

１０号住居跡からは、この他高杯、壷、鉢や把手かと思われる部分等が中央床面東半に集中して出土している。石器は、石包丁、砥石、石製品が出土しているが、石包丁は、中央床面西よりの位置で、床面より１０数*cm*浮いた状態であった。

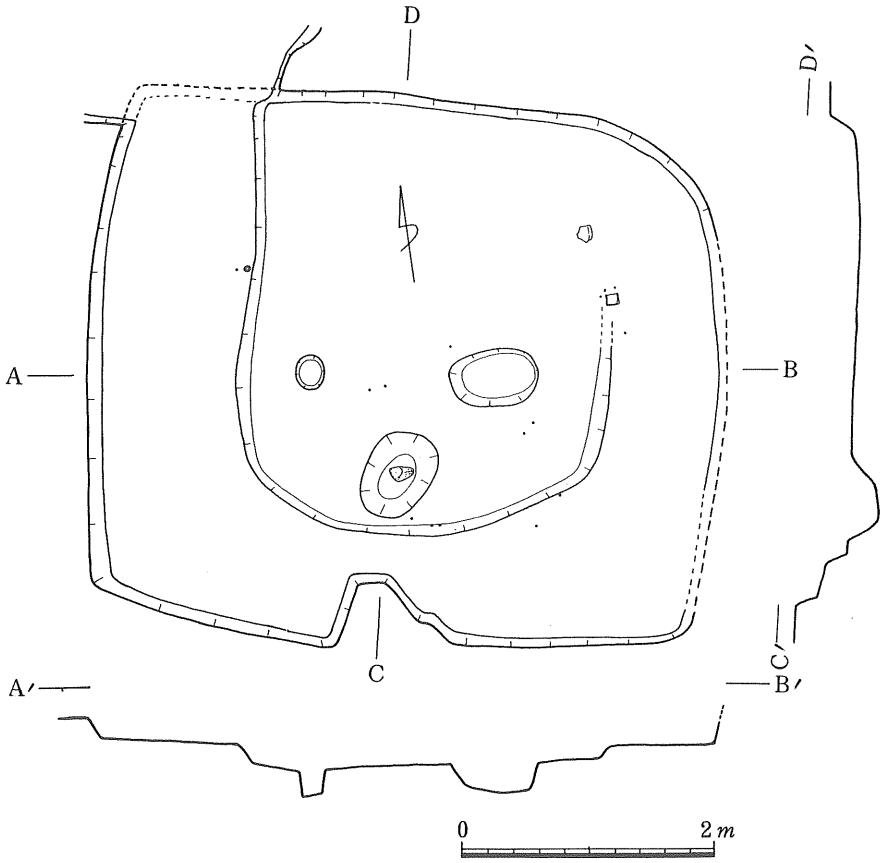


第６図　第10号竪穴住居跡実測図

（５）　第１３号住居跡　（第７図）

調査区南で、第１１号と接して検出された住居跡である。平面プランは長方形で長辺4.７５ *m*、短辺4.３５ *m*が計測される。南辺中央部に１ケ所の突出部があり、ベット状遺構は、住居内の西辺、南辺及び東辺の一部で確認されている。ベッド状遺構の幅は西辺で約１１０*cm*あり、床面の高さは中央床面より２０*cm*ほど高くなっている。ピットは３ケ所検出されているが、柱穴と考えられるものも中央西へ偏する径約４０*cm*、深さ４０*cm*の１ケ所である。

出土遺物は少ないが、中央床面では鉄器片、緑泥片岩のチップ等が出土している。住居跡東半では、床面からわずかに浮いた状態であったが、弥生中期のＬ字状突帯をもつ甕片などが出土している。



第７図　第13号竪穴住居跡実測図

遺　　物

（１）　第７号住居跡出土遺物　（第８，９図）

壷形土器は、長頸壷（第８図３）、二重口縁壷（第８図４，５，６）、短頸壷（第８図８，９）などが出土している。３は口径１２.１㎝あり、全面にススが付着している。口縁部は若干肥厚し、波状文が施文されている。頸部はヘラミガキされている。胎土は粒子が粗く、砂質様の感を与える。４～６は、頸部が大きく外反し、稜をつくって反転している。反転部に波状文がみられる。口径は４で１３.１㎝、５で１５.０㎝、６で１６.１㎝を測る。胎土に砂粒を含む。８，９は口縁部が短く外反し、９の口縁端は丸くおさめられ、８は若干つまみ上げ状となっている。肩部はあまり張らず、長胴形となすと考えられる。７は、口縁部を欠損するがほぼ完形に復原できた壷である。口縁部は、直線的に開き、底部は不安定な平底である。最大径は胴部中位にあり、約２２㎝と推定される。厚さはわりに厚く１㎝内外あり、胎土に砂粒を含む。頸部及び胴部のハケ目は微細であり、口縁部のハケ目はナデ消されている。

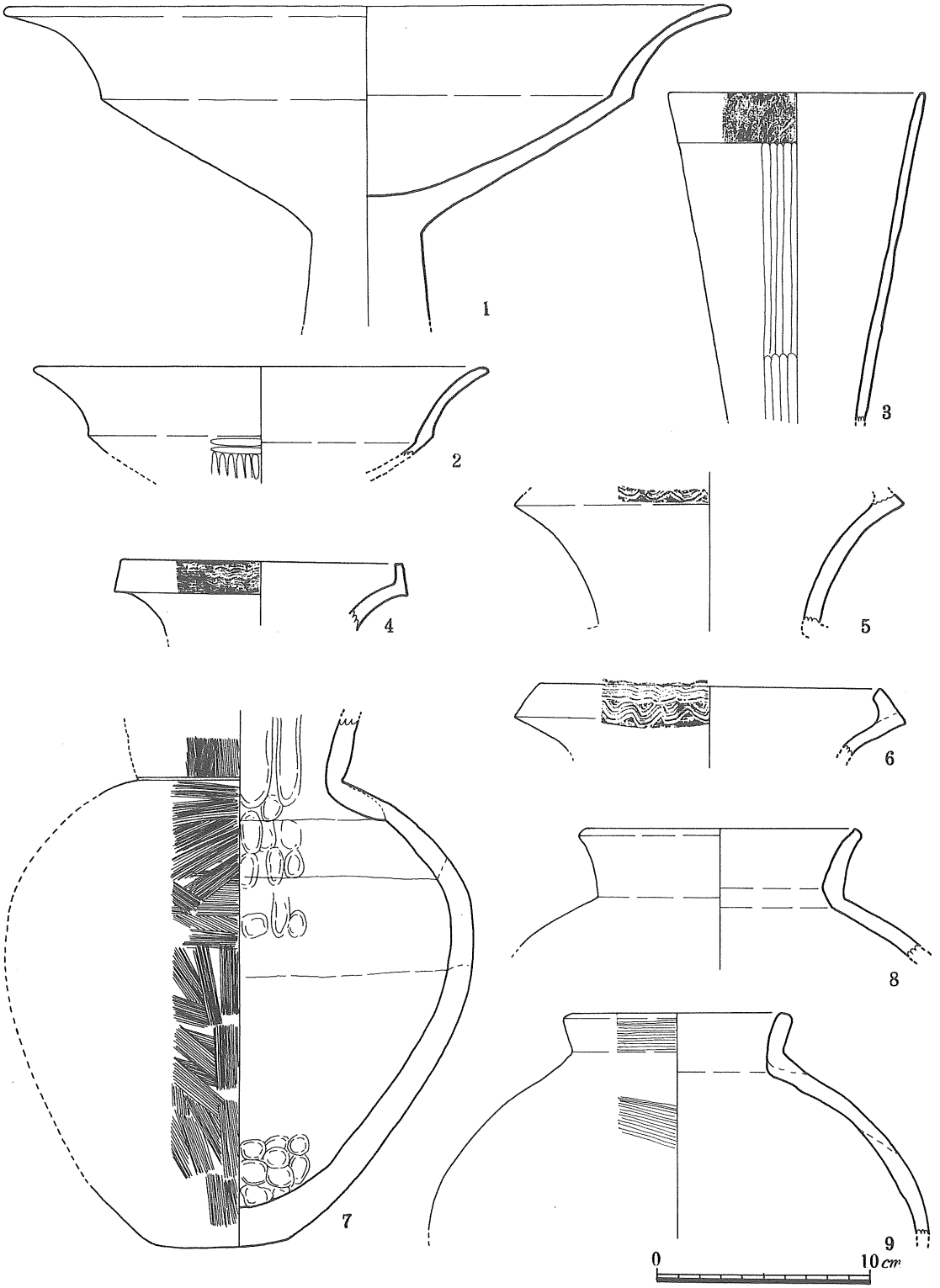
高杯形土器は、口径３０㎝前後（第８図１）と２０㎝前後（第８図２）との２種ある。杯部下半は内攣して伸び、上半部は大きく外反する。器面はヘラ磨きである。

甕形土器（第９図１）は、口縁部が内傾ぎみに立ち上がり、中ほどより外反している。口縁部外面は、ハケにより肩部に段をつくり上へカキ上げた後、ヨコナデされている。２は、口径13.2㎝あり、段をつくらないカキ上げがみられ、口縁端部は丸くおさめられている。

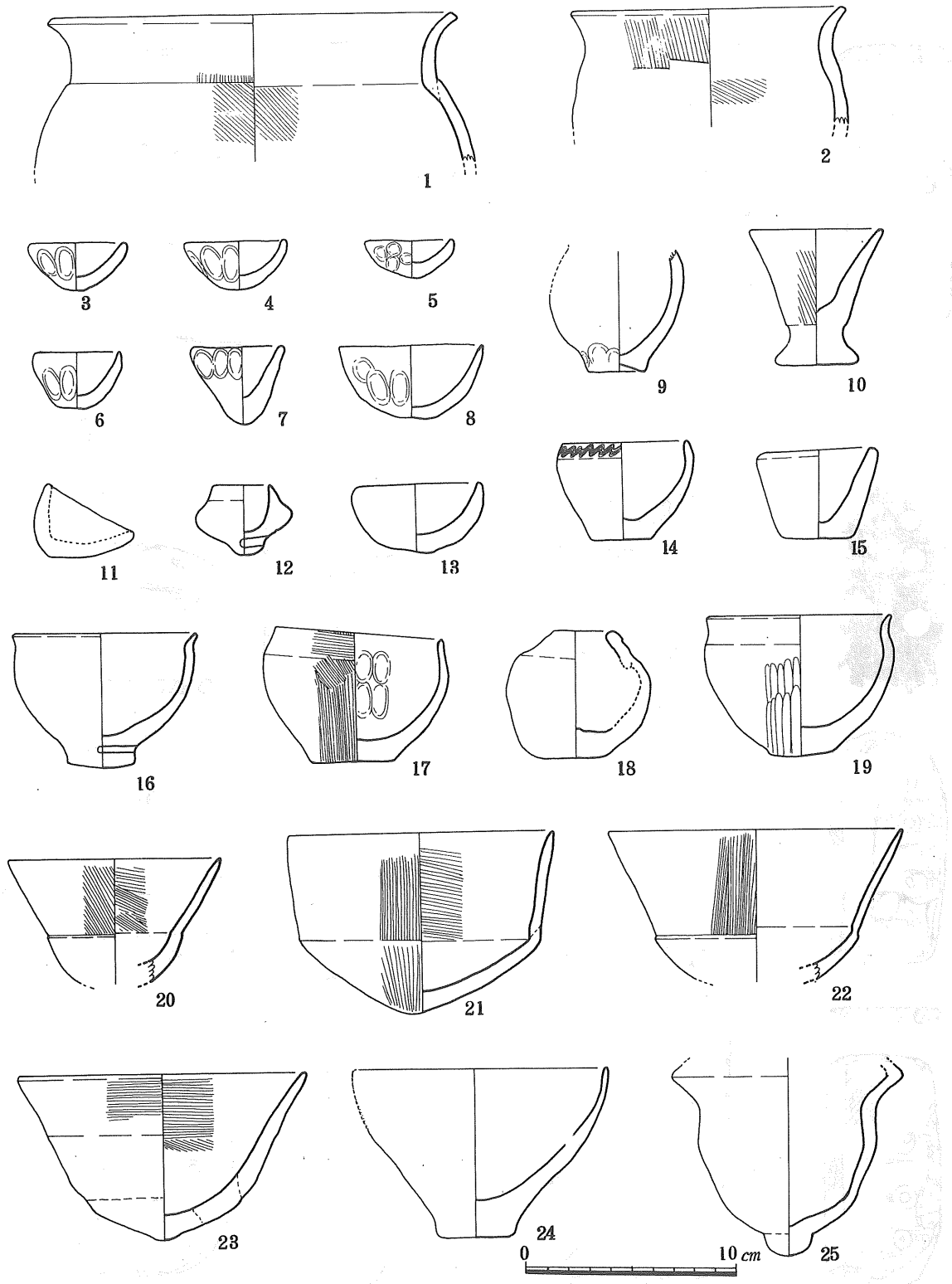
第９図の２０～２３は小形丸底土器である。口縁部が長く直線的に外上方に開き、体部は小さい。２０の調整は口縁部をハケ、体部はヘラミガキである。２１は口縁部、体部ともハケ目である。

この他、７号住居跡からは小形の鉢形土器、手捏ね土器が出土している。小形鉢形土器はつくりも丁寧で、ナデ（１６）、ハケ（１７）、ヘラ（１９）で器面調整されており、１４には波状文もみられる。手捏ね土器は口径４～７㎝で、底部は丸底である。器面に指頭痕を残すものが多い。１２及び１６の底部には、径４㎜前後の貫通孔がある。

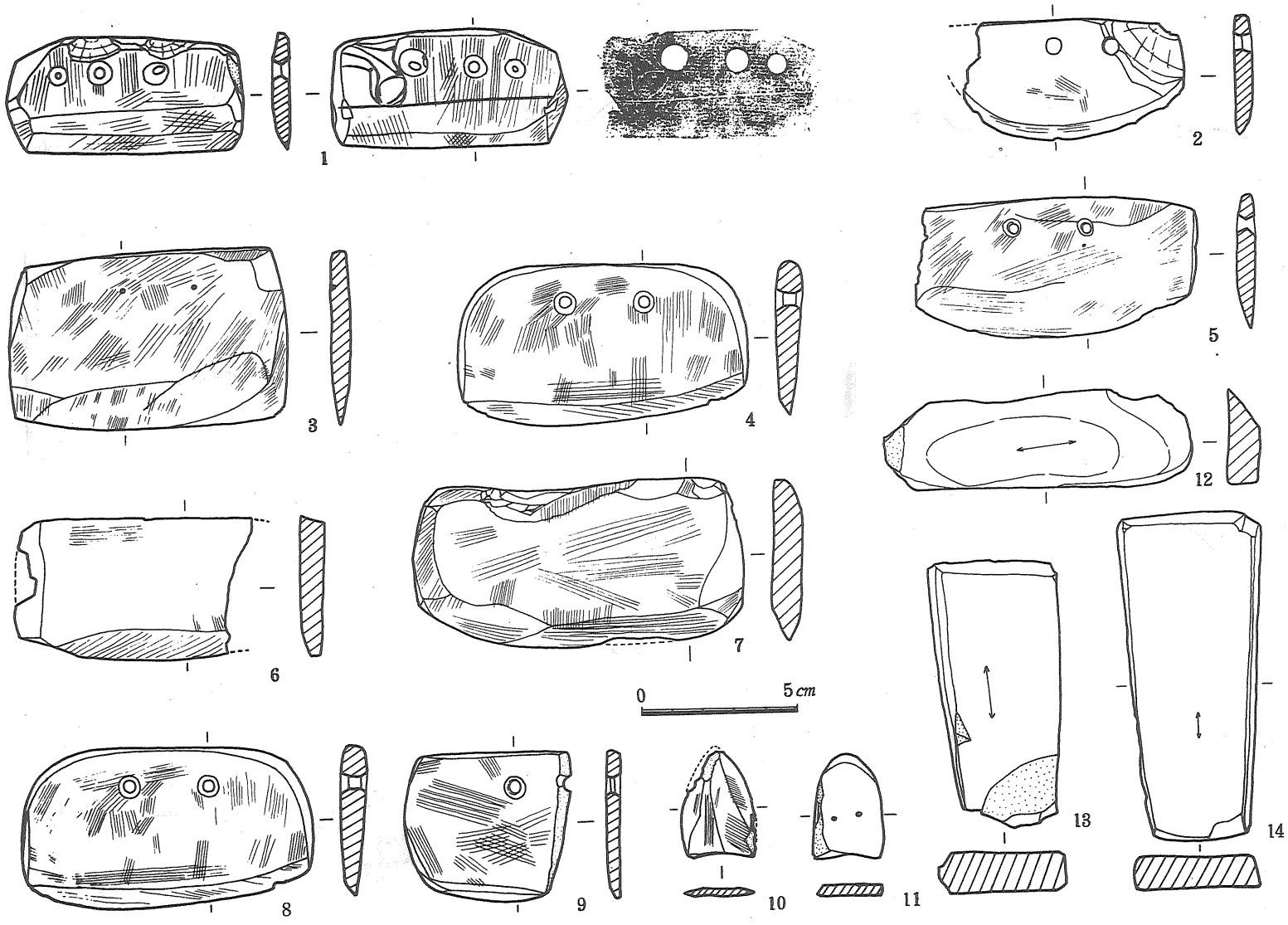
石器は、石包丁（第１０図１～６）、砥石（１３）、磨製石鏃未製品（１１）がある。石包丁は、いずれも方形であり、長さ７～９㎝、幅４～5.5㎝と小形であり、穿孔は２個を基本とする。石質は粘板岩である。１は、長さ7.6㎝、幅3.7㎝の片刃の石包丁である。穿孔は３孔あり両面から穿孔されている。右隅には線刻画があるが、何をモチーフしたのか明確でない。３は、両刃の石包丁で未究の穿孔がある。未製品の磨製石鏃にも未完の穿孔がみられる。



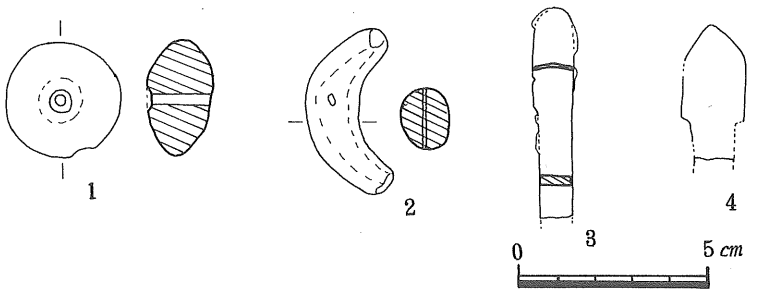
第８図　第７号竪穴住居跡出土遺物



第９図　第７号竪穴住居跡出土遺物



第 10 図　祝吉遺跡出土遺物（石器）　7 号住居跡（ 1 ～ 6. 1 1. 1 3 ）10 号住居跡(12) 15 号住居跡(8) 18 号住居跡(12)



第11図　第７号竪穴住居跡出土遺物

鉄器は、鉈（第11図３）、鉄鏃(4)が出土している。鉈は、現長5.6㎝、幅0.9㎝、刃長約2.6㎝あり、幅は茎部よりわずかに広くなっている。刃部の反りはわずかである。

その他、土製品が出土している。第11図１は、そろばん玉様の土製品で径3.0㎝、厚さ1.8㎝を測る。２は、勾玉様土製品で楕円状の断面をもつ、全長4.4㎝あり、中央に径１㎜の穿孔が１ケ所ある。

（２）　第１０号住居跡出土遺物　（第12図、第10図12）

１は、二重口縁壷の口縁部で反転部に波状文が施文されている。口径１４.２㎝。

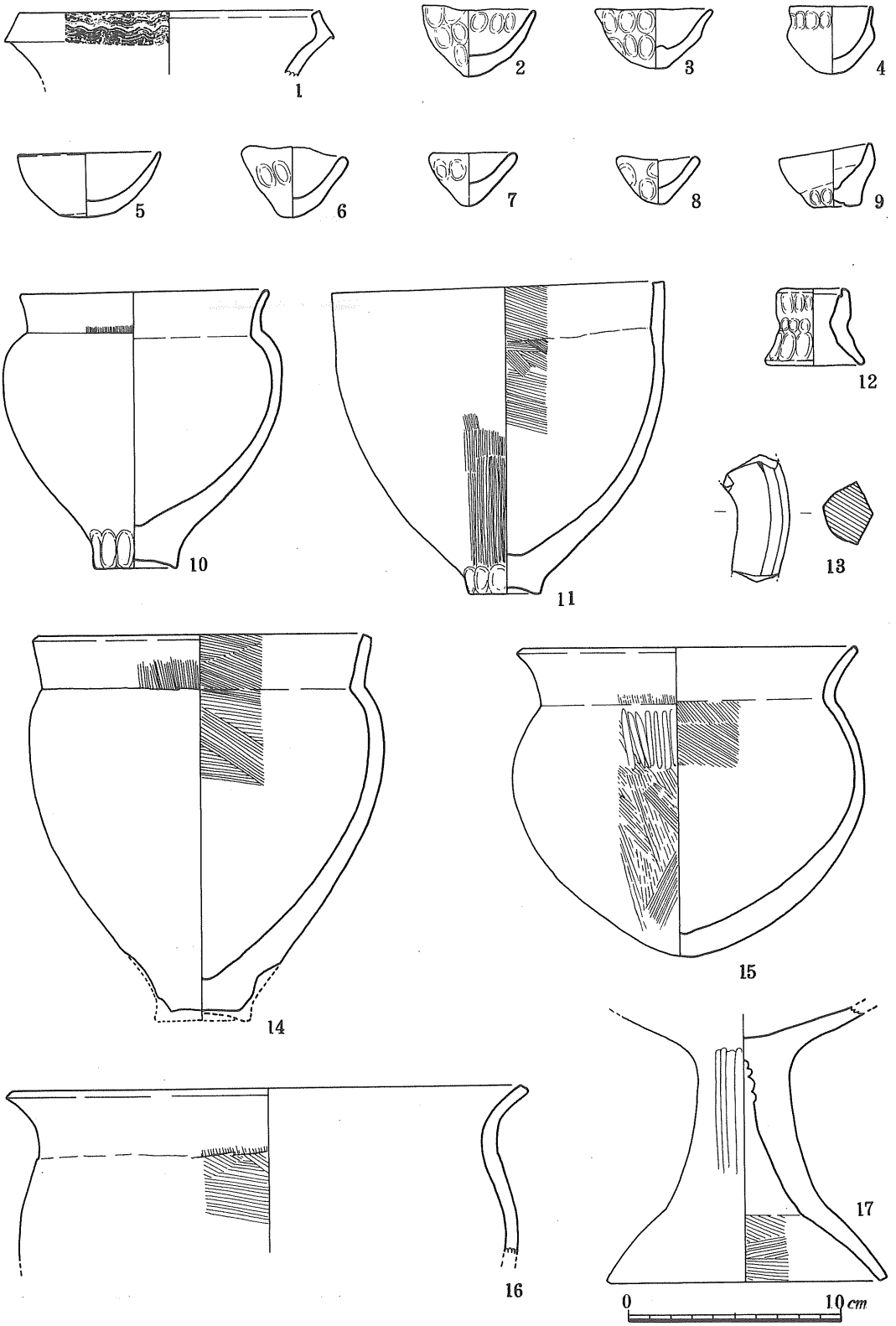
甕形土器は、口縁が外反する口縁（10，14，15，16）と直口する口縁（11）がある。１０は、口径１１.７㎝、器高１３㎝で最大径は胴部上位にあり１３.１㎝を測る。口縁部は、内面に稜をつくって外反し、外面は肩部との境に段をつくるカキ上げ後、ヨコナデされている。底部はあげ底で指頭痕を残す。口径１５.７㎝、器高１４.４㎝である。14，16の口縁部の手法は、10の手法に類似する。15は、口径１６㎝、器高１４.５㎝の丸底の甕形土器である。口縁部の手法は10の手法に類似しているが、肩部はハケ調整のあとヘラミガキされている。

１７は、高杯の脚部で、ラッパ状に開く。筒部はヘラミガキである。

２～９は手捏ね土器で口径４～７㎝で多くは指頭痕を残す。４は、口縁部をつまみ上げ肩が張っている。５はハケ調整である。１２は、器台形の手捏ね土器で口径3.0㎝、器高3.6㎝を測る。

１９は、把手と考えられる部分である。器面はヘラミガキされ、外側は切り落され、三角状の断面をなしている。

石器は石包丁（第１０図８）、砥石が出土している。石包丁は、長方形で長さ9.3㎝、幅5.1㎝で両面より穿孔された２孔をもつ。刃は片刃である。



第12図　第10号竪穴住居跡出土遺物

（３）　第１３号住居跡出土遺物　（第13図１～６，８）

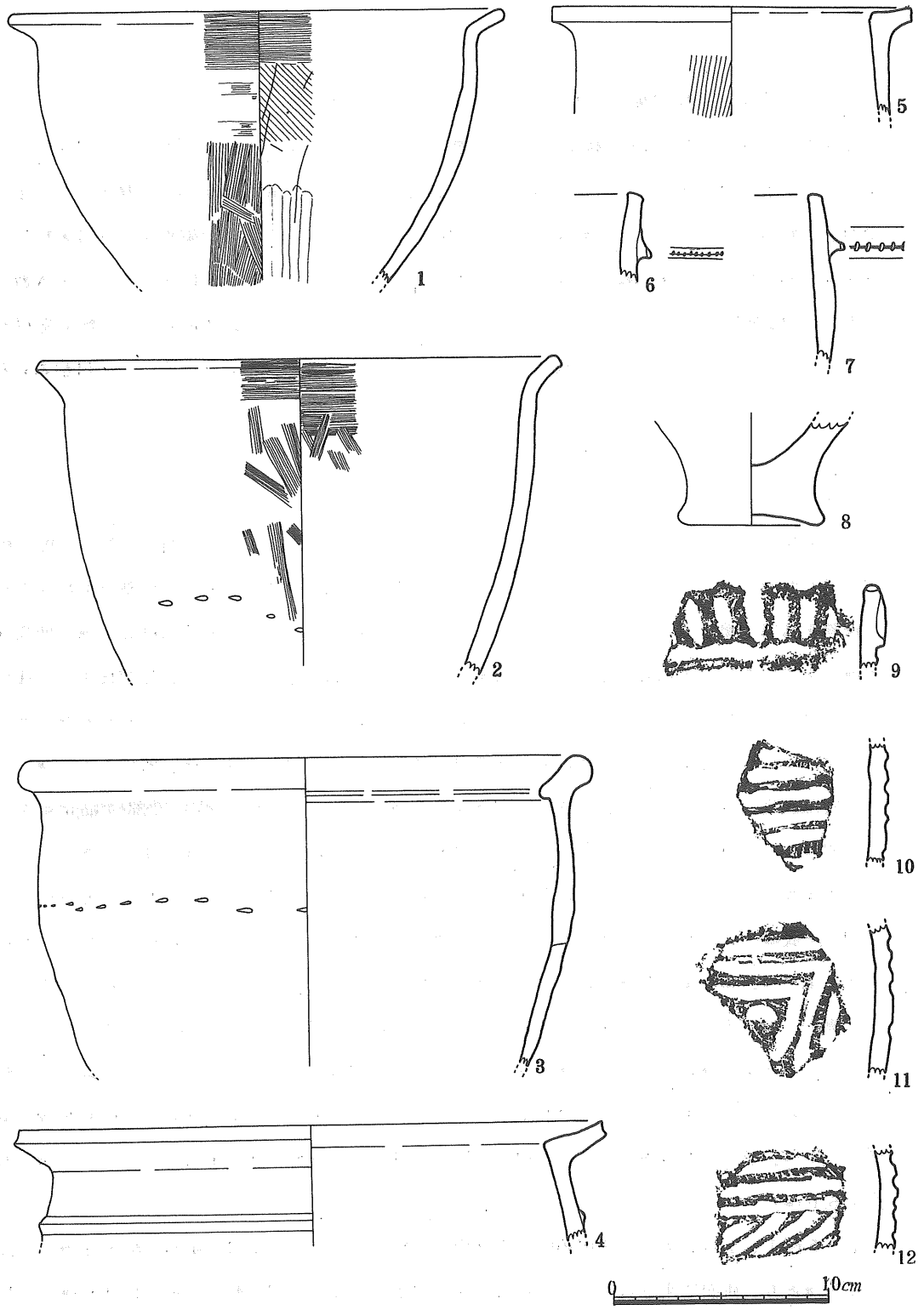
第１３号出土土器で甕形土器は、口縁の形態から外反するもの（１，２）Ｔ字状突帯をもつもの（３）、Ｌ字状突帯をもつもの（５，６）、刻目突帯をもつ（６）の４つに分類される。１，２は、口縁部が短かく外反し、胴部のハケは方向が一定せず短かい。２の胴部下半には米粒大の刺突文がみられる。３の口縁部はＴ字状をなし、端部は肥厚している。口縁部はヨコナデされ、胴部下半は剥離が著しいがかすかにハケ目がみられる。胴部中位には、２に見られた刺突文がある。Ｌ字状口縁を有する４は、口縁下に１条の突帯があり、５はタテ方向の荒いハケ目がみられる。

（４）　その他住居跡出土遺物　（第14図、第15図）

第１４図の１～６は、第１１中住居跡の出土遺物である。２，４，５は、西突出部つけ根で検出された貯蔵穴から出土している。１は、脚付小形丸底土器と考えられる。口縁部は欠損するが、口縁部と体部の境を示す稜がわずかに残存している。２は、小形の無頸壷で口径5.1㎝、器高5.4㎝である。３は、小形丸底土器で、口縁部は長く、直線的に外上方に開き、体部は小さく浅い。口縁部はハケ調整であり、体部と口縁を画するための沈線が一条巡っている。口径9.6㎝、器高6.2㎝。４は、口縁部が短かく外反し、体部は扁球形をなす。口径１３.２㎝、器高１１.１㎝。５は、底部が高台様になる小形鉢である。口径１０.３㎝、器高5.8㎝。6は、器台で受部が内面に稜をもって開き、くびれ部は上位にある。穿孔がくびれ部下にあり、上から下方向の穿孔である。

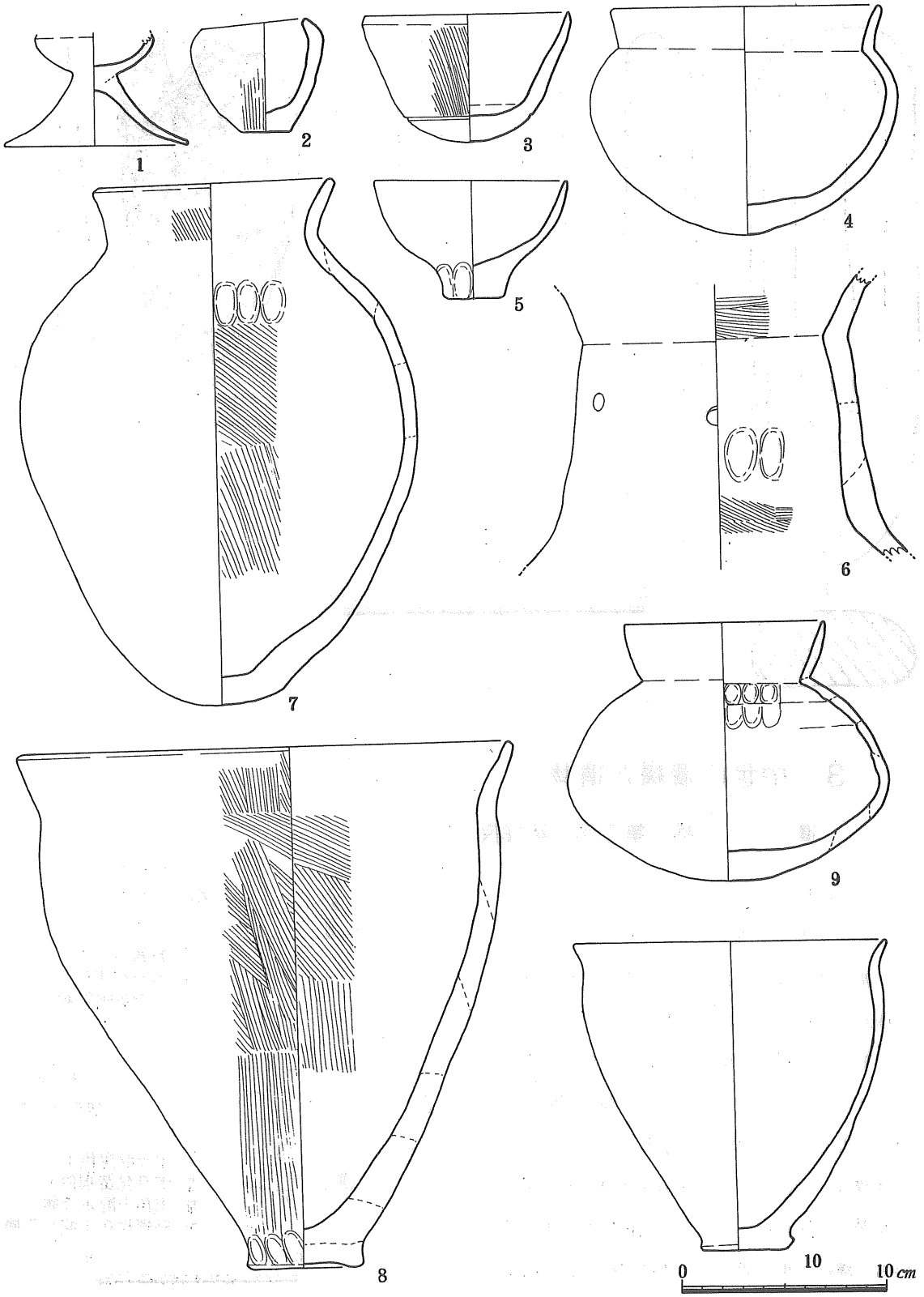
第１４図７～１０及び第　図７は第１２号住居跡出土である。７は、口縁部が短かく外反し、長胴で丸底様の底部をもつ壷形土器である。内外面のハケは粗く、肩部内面に指頭痕が見られる口径１１.７㎝、胴径１９.２㎝、器高２５.４㎝。８は、口縁部が外反し、肩部より直線的に底部へ続く甕形土器である。底部はあげ底で指頭痕を残す。口縁部外面に段を有しないカキ上げがみられる。口径２４.１㎝、器高２５.４㎝。９は、口縁部が内彎ぎみに短かく立ち上がり、扁球形の胴部をもつ壷形土器である。最大径は胴部下半にあり、安定感のある土器である。口径9.8㎝、胴径１５.７㎝、器高１２.６㎝。１０は、口縁が短かく外反する甕形土器である。口径１５.３㎝、器高１５.０㎝。

第１５図１，２は、第１号住居跡床面より出土した石器である。１は、砥石で幅8.3㎝、全長２６.５㎝あり、両面使用されている。石材は砂岩である。２は、軽石製品で最大幅9.0㎝、全長１６.３㎝、厚さ0.5～2.1㎝を測る。

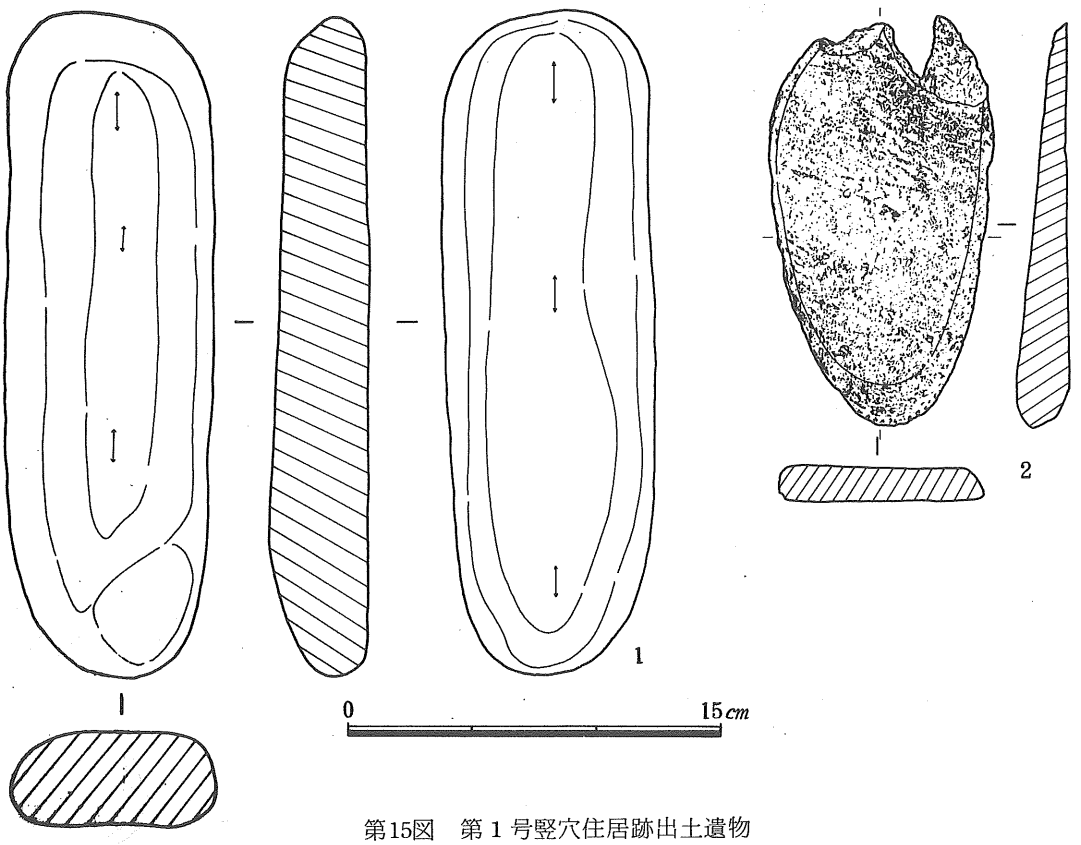


第 13 号住居跡出土（1～6.8）
第 12 号住居跡出土(7)

第13図　第13号竪穴住居跡出土遺物及び縄文土器



第14図　第11，12号竪穴住居跡出土遺物



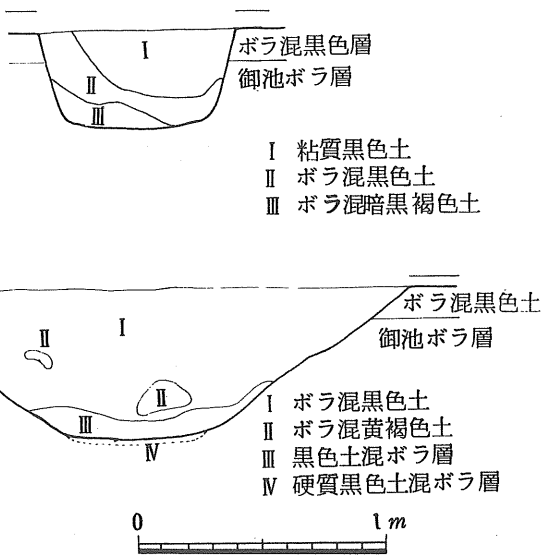
第15図　第１号竪穴住居跡出土遺物

３．中世の遺構と遺物

遺　　構（第２図　第16図）

中世の遺構は、調査北区（Ⅰ，Ⅱ区）において主として溝状遺構及び多くの柱穴が検出された。溝状遺構は５条あり、Ⅰ，Ⅱ区で検出された南北に走行する溝は東よりＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ溝と、Ⅳ区で検出され東西へ走行する溝をＥ溝と呼称することにした。Ａ，Ｂ，Ｅ溝は断面がＵ字形をなし、Ｃ，Ｄ溝はＶ字形をなしている。

Ａ溝は、上幅８０㎝、底幅６０㎝、深さ４０㎝を測り、床面は、御池ボラ層に掘り込まれている。溝は、東、北へＬ字状に走行し、床面が若干南へ傾斜するが、御池ボラ層に掘り込まれ



第16図　溝状遺構断面図

た床面は特別な加工がなされていないため、排水的機能はないと思われる。B溝は、中央部でA溝と結合する。

D溝は、断面V字形をなし、北及び東へL字状に走行する。上幅１４０～２２０㎝、底幅約60㎝である。　溝は、御池ボラ層に掘り込まれ、床面は、つき固められており、厚さ２～３㎝の黒色土混ボラ層の固い面が形成されている。床面の高さは、L字状に折れる付近が最も高く、北及び東へ低くなっており、北端の底には、砂の薄い層も認められたことから排水的機能をもっていたと考えられる。

溝の検出された周辺では、多数の柱穴が検出されているが、建物の規模を知りえたのは、　区中ほどのB，D溝上に位置する２間×４間（3.9 m×9.1 m）の掘立柱建物１棟のみである。この掘立柱建物は、柱穴がD溝の固い床面を掘り下げていることにより、D溝より後出すると考えられる。

遺　　物（図版14）

中世の遺物は、溝中及びその周辺から土師器皿、青磁、白磁、染付、陶器等が出土しているがその量は少ない。土師器は皿のみでいずれも糸切り底である。青磁は、蓮弁文碗、櫛描文碗、盤、線刻細蓮弁文碗、稜花小皿など１３世紀から１６世紀前半に比定される青磁が出土している。白磁は、高台を抉る小皿、碗などがあり、染付は嘉靖期のものである。陶器には、備前風摺鉢などが出土している。この他、近世の陶磁器も出土している。

第Ⅳ章　結　語

第２次の祝吉遺跡の発掘調査では、弥生時代の竪穴住居跡１３、中世の溝状遺構５及び柱穴群が検出され、これらの遺構に伴う遺物の他、縄文土器も出土している。縄文土器は、小片で数点と少ないが、文様の特徴より縄文後期前半に比定される。弥生時代の遺物は、弥生終末期に位置づけられるものであるが、出土土器には、新・旧両要素が認められる。宮崎県下における弥生終末期の資料は、古くから知られていた加納遺跡[註1]、下那珂貝塚[註2]の資料に加えて、近年、大萩遺跡[註3]、丸谷第１遺跡[註4]、中無田遺跡[註5]、灰塚遺跡[註6]など調査例の増加とともに、セット関係など好資料も得られており、編年の確立されていない現在、弥生終末期土器の再検討が望まれる。

検出された１３軒の竪穴住居跡の中で特に注目されるのは、７号と１０号住居跡である。７号住居跡は、中軸線８ mを越す大型の竪穴住居で多くの手捏ね土器、線刻のある石包丁、また、底部に貫通孔のある土器など特異な遺物を出土している。また、中央床面で検出された周溝及び小ピ

ットを伴う長方形プランの遺構は、その性格については今後の問題として残されるが、７号住居跡の性格を考えるうえで興味ある遺構である。

１０号住居跡は、ベッド状遺構上に突出部により一空間が設置されており、その空間よりの朱のはいる小形甕形土器、直立する手捏ね土器、朱玉など出土や、南壁で検出された立石を伴う土壙などから、１０号住居跡の性格は、何らかの祭祀に関する住居であった可能性が高い。

祝吉遺跡では、第１次調査で弥生時代の竪穴住居跡７軒[註7]、第２次調査で１３軒の計２０軒の住居跡が検出されたことなり。時期は大半が弥生終末期に位置づけられるものである。第１次調査では、住居跡から線刻画や記号文をもつ土器等が出土しているが、第２次調査では１点の出土も見ていない。このことは、第１次調査では、石器製造の住居跡であった第１号住居跡が、第２次調査では、何らかの祭祀を彷彿させる住居跡が検出されていることより、第１次で検出された住居群と第２次で検出された住居群とではその性格が異なるのかもしれない。

さて、今日の調査で検出された住居跡の内部施設として、突出部、ベッド状遺構、住居の壁際に位置する貯蔵穴等がある。突出部を伴う住居跡の発見例は、大萩遺跡、丸谷第１遺跡、上示野原遺跡の他、近年、鹿児島県隼人町小田遺跡[註8]、新富町新田原遺跡[註9]の他大分県下でも報告されてきている[註10]。宮崎県下における突出部の初現は従来弥生終末に限定されていたが[註11]、近年調査された新田原遺跡では弥生中期末ないし後期初頭に比定され、祝吉遺跡第１３号住居跡もほぼ同時期に位置づけられるものであり、弥生中期末には既に成立していることが判明しつつある。特に新田原遺跡の場合、柱穴１０突出部の延長上にあり、既に完成されている感がある。

突出部の機能は、間仕切り的機能をもつ点については疑う余地はなくなりつつあるが、間仕切りする目的は、住居内を部屋割りする場合や、住居内に一空間を設置する場合などがあり多様にわたっているようである。突出部をもつ住居は、ベッド状遺構をもつ場合が多く、間仕りを行う目的を推定する場合においては、ベッド状遺構及び、柱穴との関係を考慮する必要があろう。今後の資料の増加をまちたい。

今回の調査で検出された溝状遺構及び柱穴は、中世でも室町時代のものと考えられる。祝吉町内には、古石塔が多く、北郷氏の家臣藤井家に関するものでないかとされる古石塔や、本田家管理の肝属系古石塔などがあり[註12]、これらの古石塔が今回、検出された遺構群と関係あるかは明確でない。祝吉遺跡の東隣には土師器片等の散布も認められ、また、遺跡の東0.8㎞には、島津家発祥の地として知られる「祝吉御所跡」もあることから、この地域での中世における考古学的調査研究が進展することが望まれる。

註 1　小林行雄、杉原荘介編「弥生土器集成　本編1」　1964

註 2　石川恒太郎「宮崎県の考古学」　吉川弘文館　1968

註 3　「大萩遺跡(2)」　宮崎県教育委員会　1975

註 4　「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」　宮崎県教育委員会　1979

註 5　野間重孝「中無田遺跡出土遺物」　宮崎考古第5号　1979

註 6　「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(2)灰塚遺跡」　宮崎県教育委員会　1973

註 7　「都城市文化財調査報告書第1集、祝吉遺跡」　都城市教育委員会　1981

註 8　「上示野原遺跡」　宮崎県文化財調査報告書第　集　宮崎県教育委員会

註 9　「小田遺跡」　集人町教育委員会

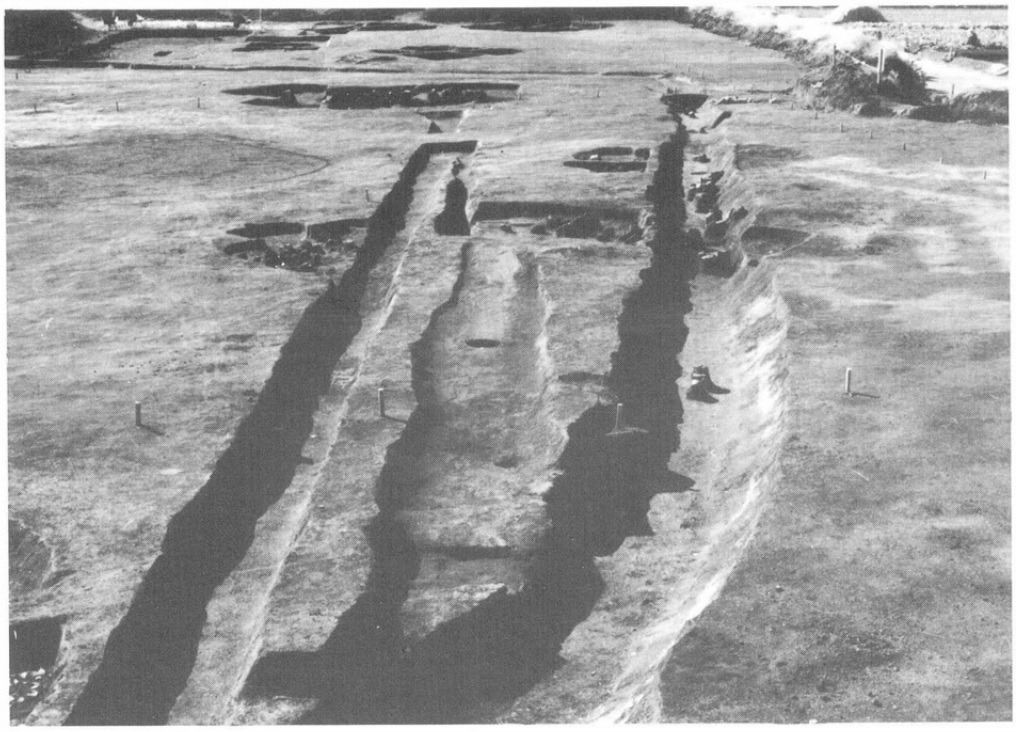
註10　昭和56年(1981)1月から昭和57年2月にかけて、新富町教育委員会によって調査され、軒の竪穴住居跡が検出され、うち軒が突出部をもっている。

註11　「大野原の遺跡」　大野町教育委員会　1980

註12　本村秀雄氏の教示による。

図　　版

図版1

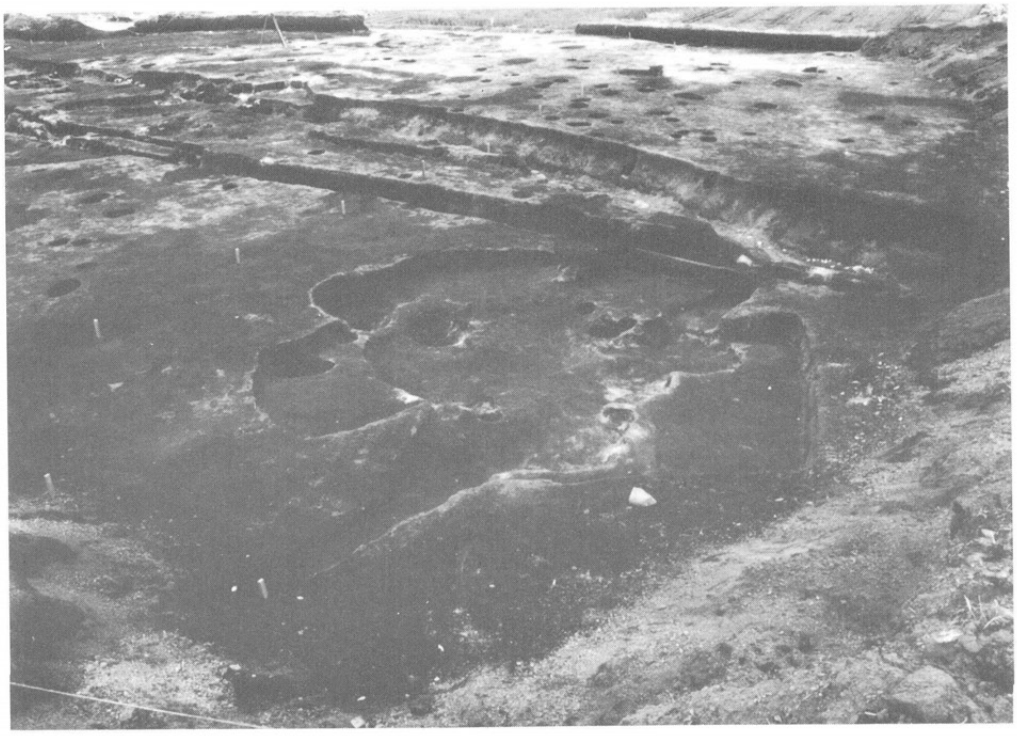


（1） 溝状遺構

（2） 溝状遺構Dと第4号竪穴住居跡

図版2

（1）第1・2号竪穴住居跡

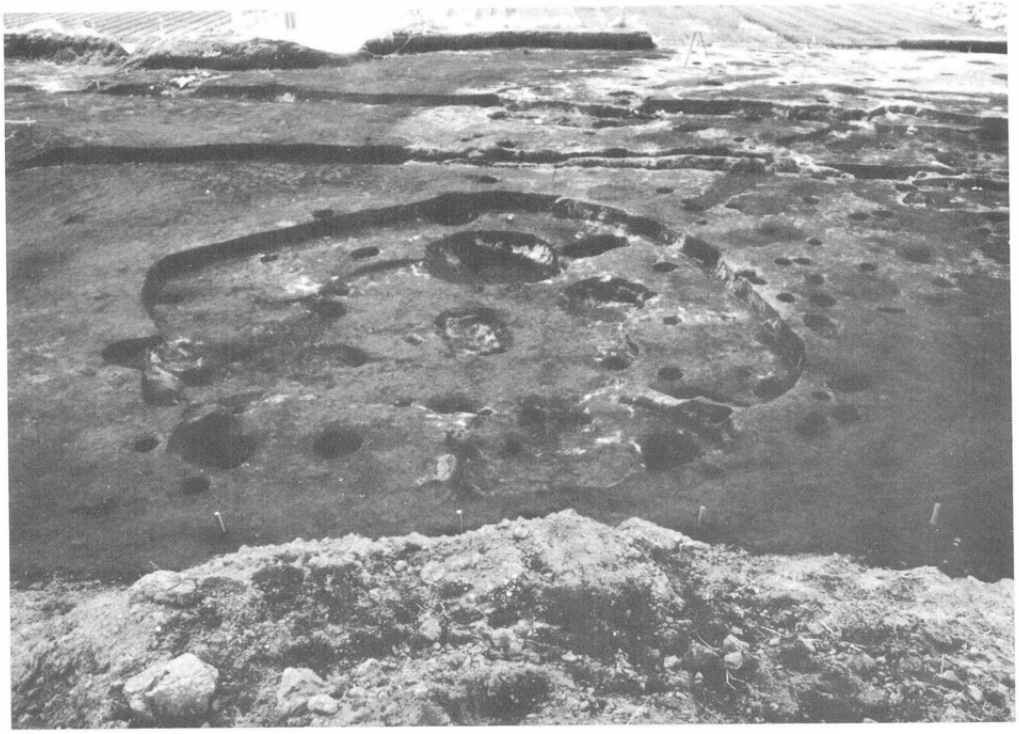


（2）第5号竪穴住居跡

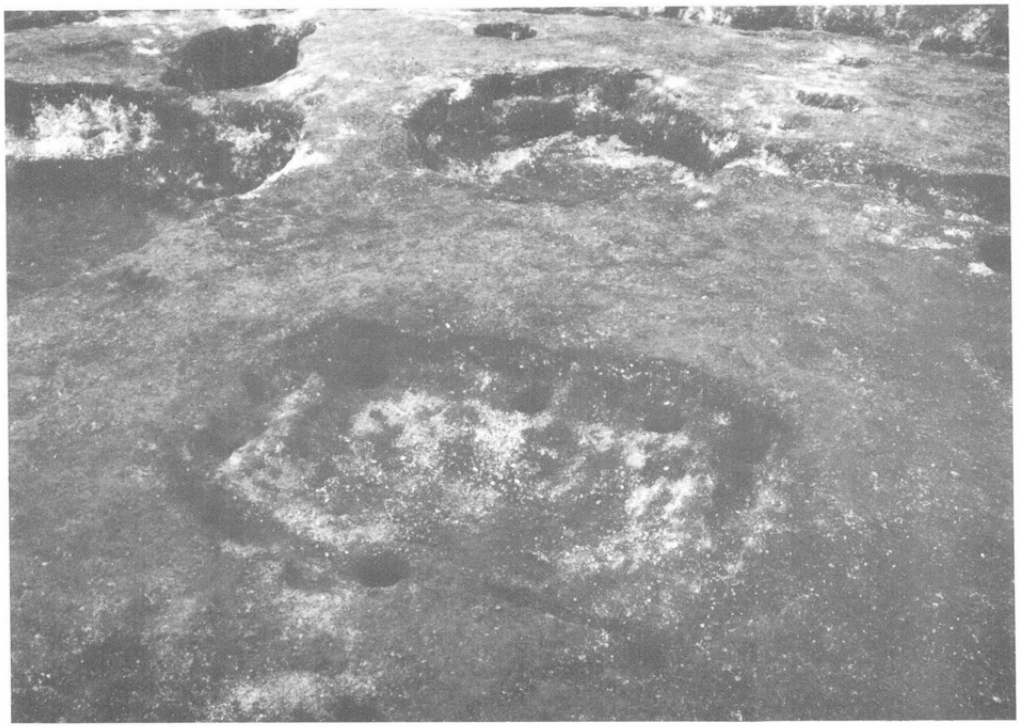
図版3

（1）第6号竪穴住居跡

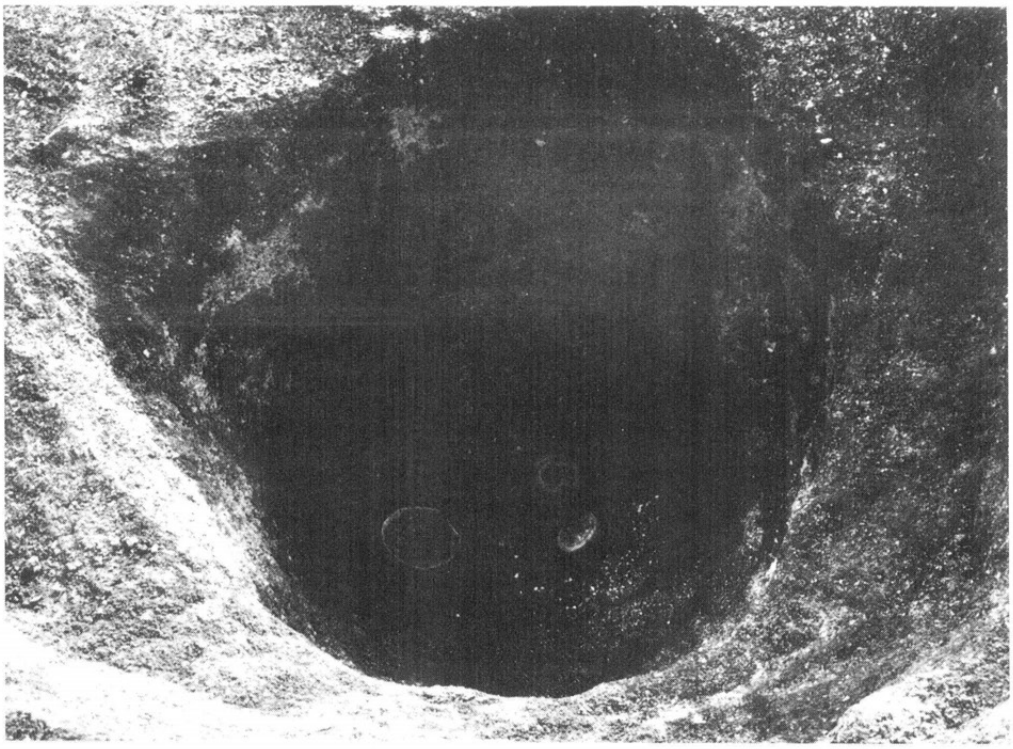
（2）第9号竪穴住居跡



（1）第7号竪穴住居跡

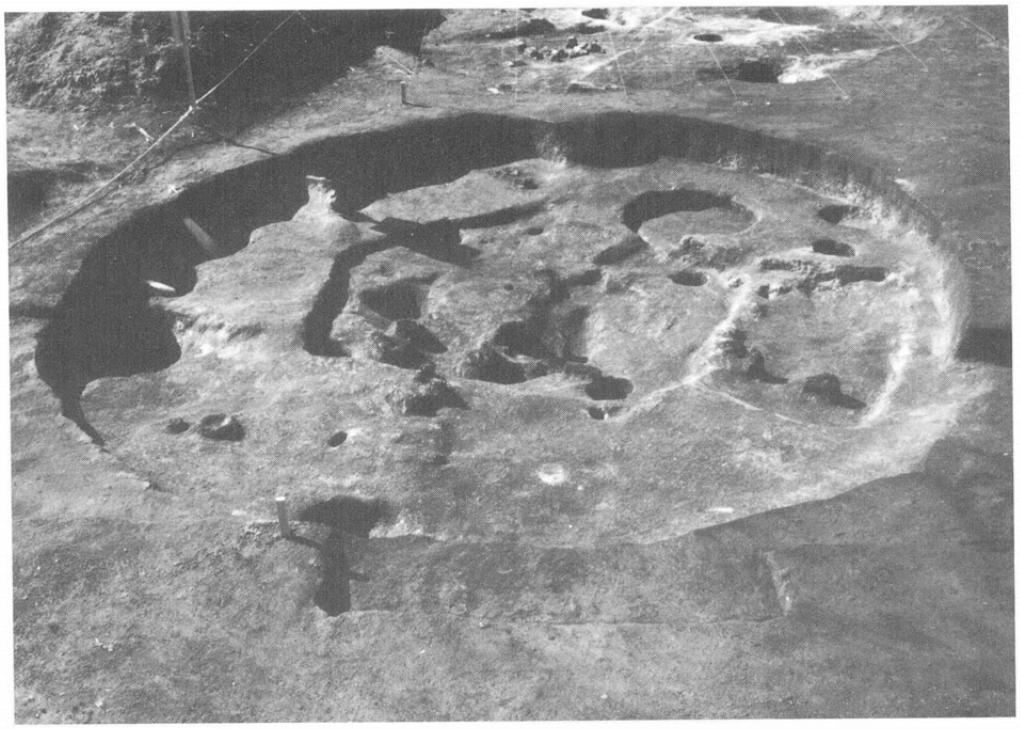


（2）第7号竪穴住居跡遺構

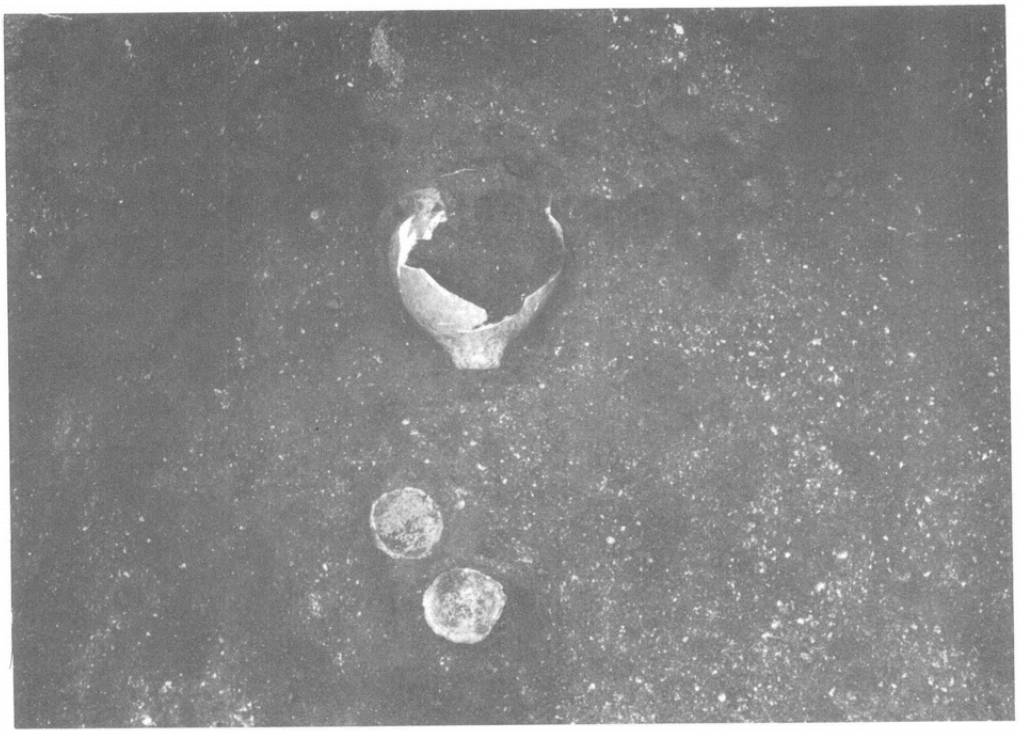


（1）第7号竪穴住居跡貯蔵穴

（2）第7号竪穴住居跡遺物出土状況

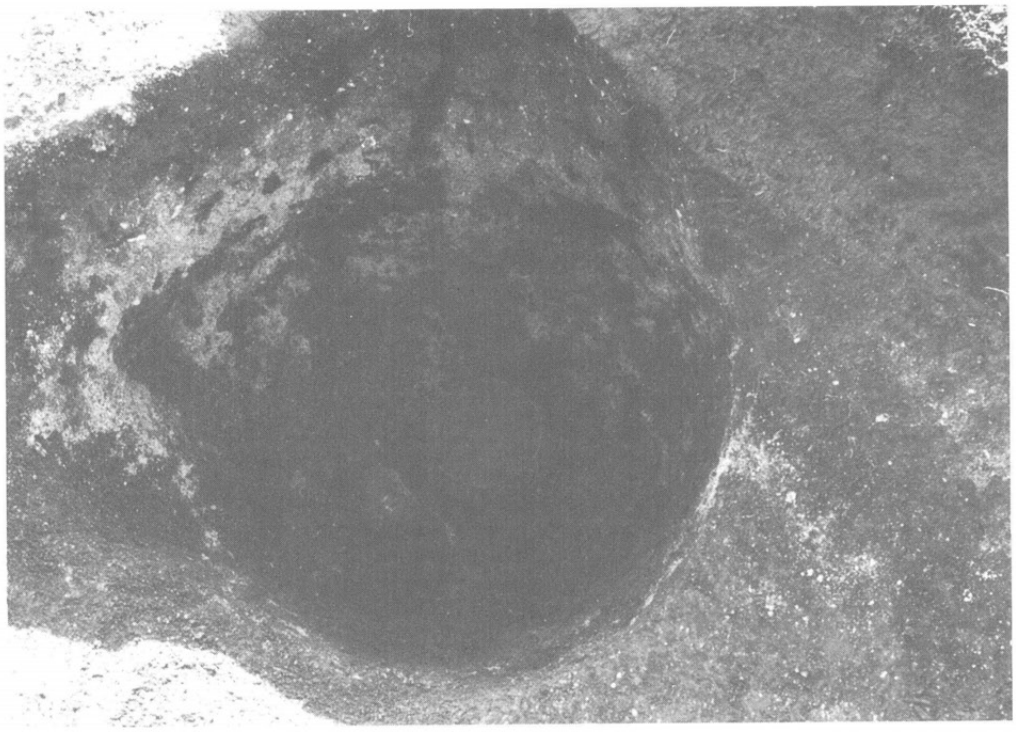


（1） 第10号竪穴住居跡

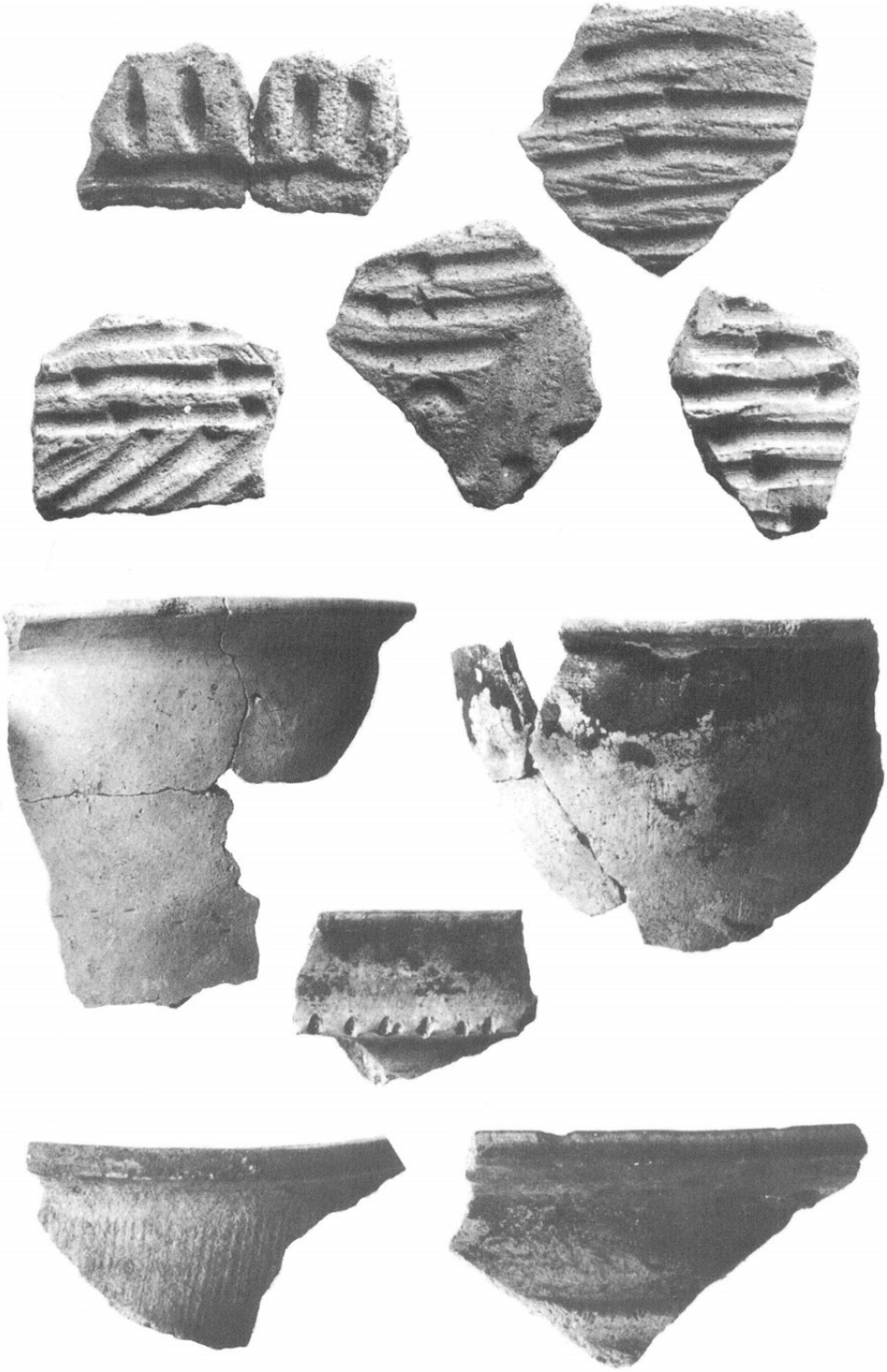


（2） 第10号竪穴住居跡出土状況

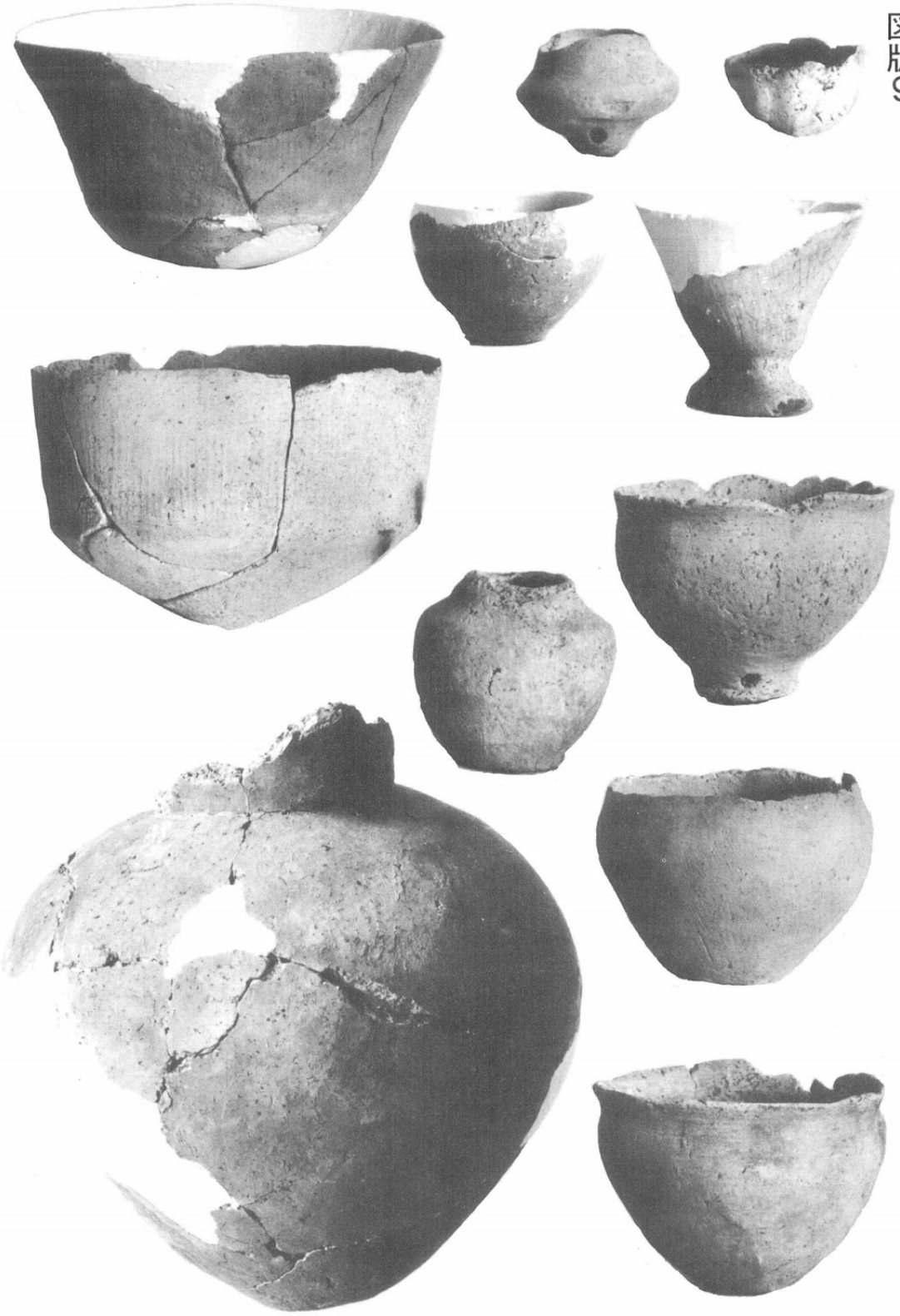
（1）第Ⅲ・Ⅳ区近景



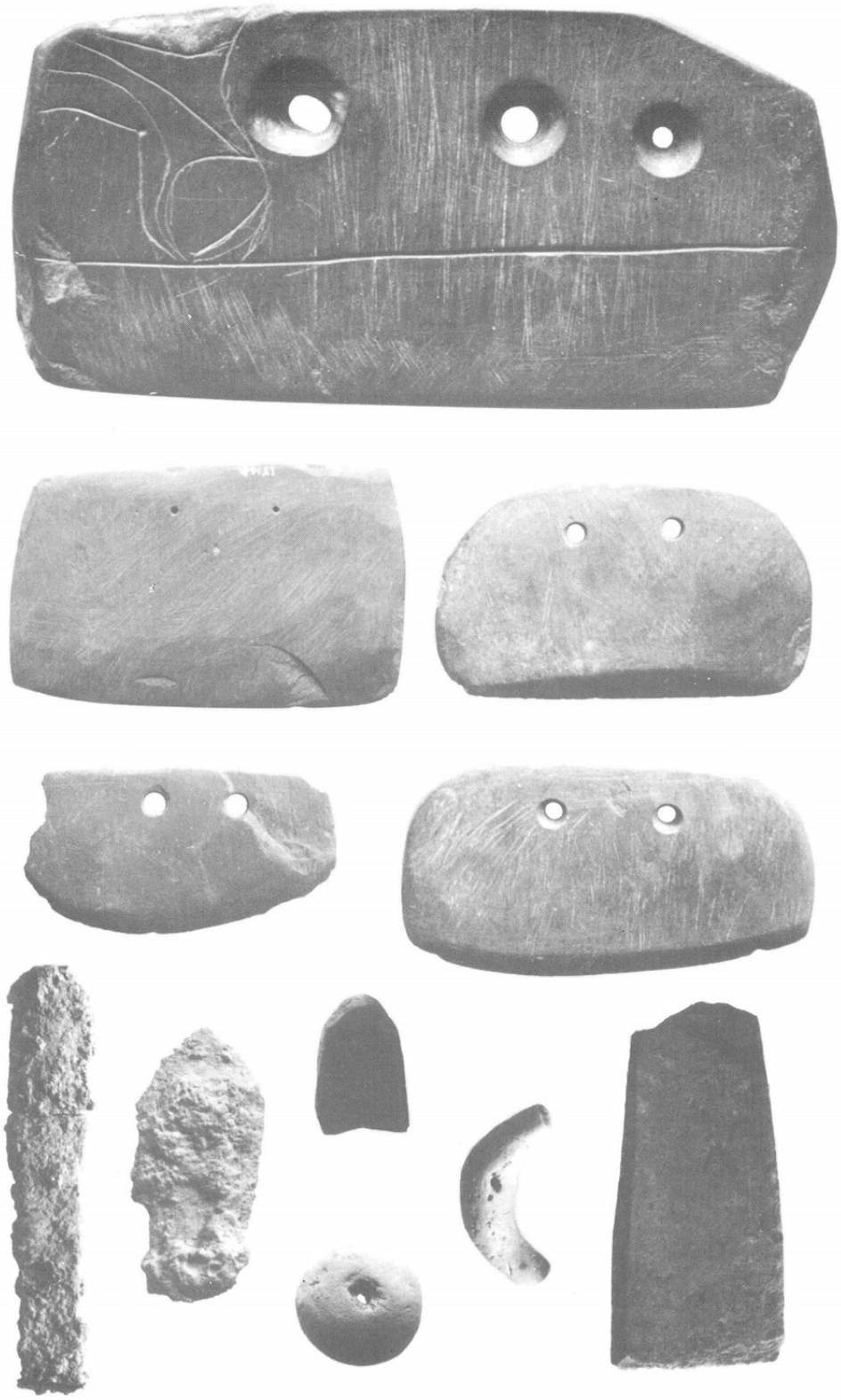
（2）第11号竪穴住居内貯蔵穴



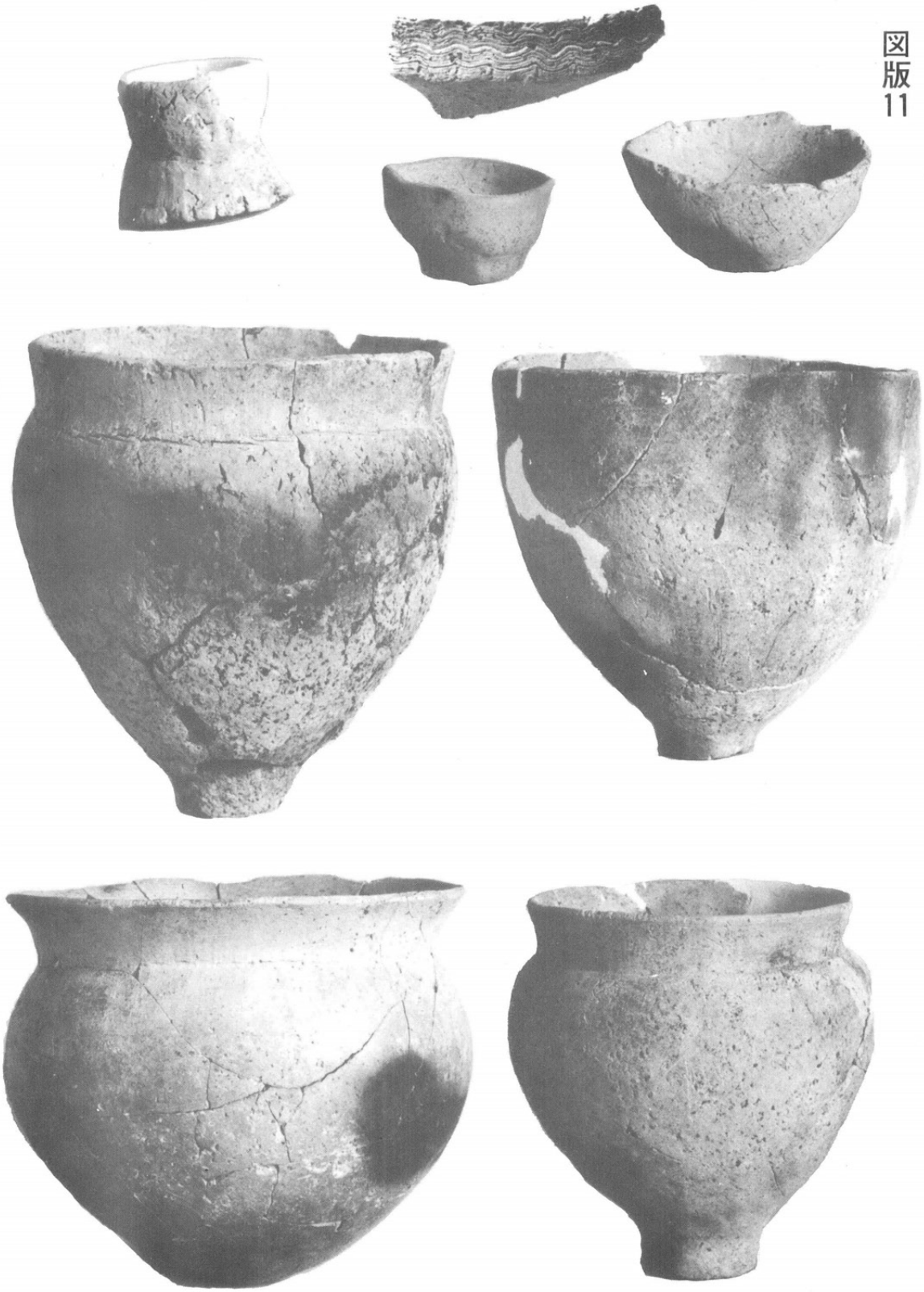
祝吉遺跡出土縄文土器・第13号竪穴住居出土遺物



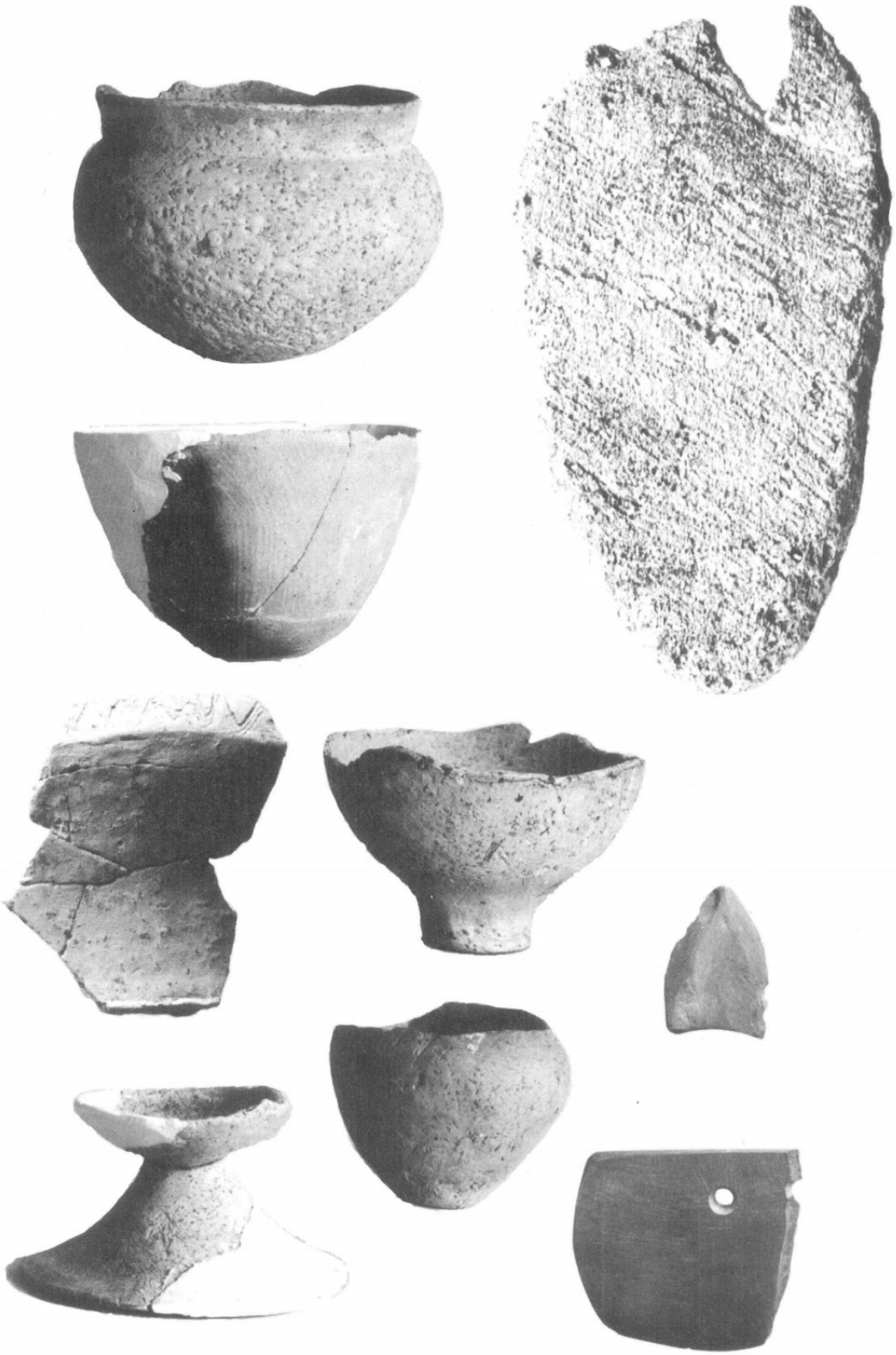
第７号竪穴住居跡出土遺物



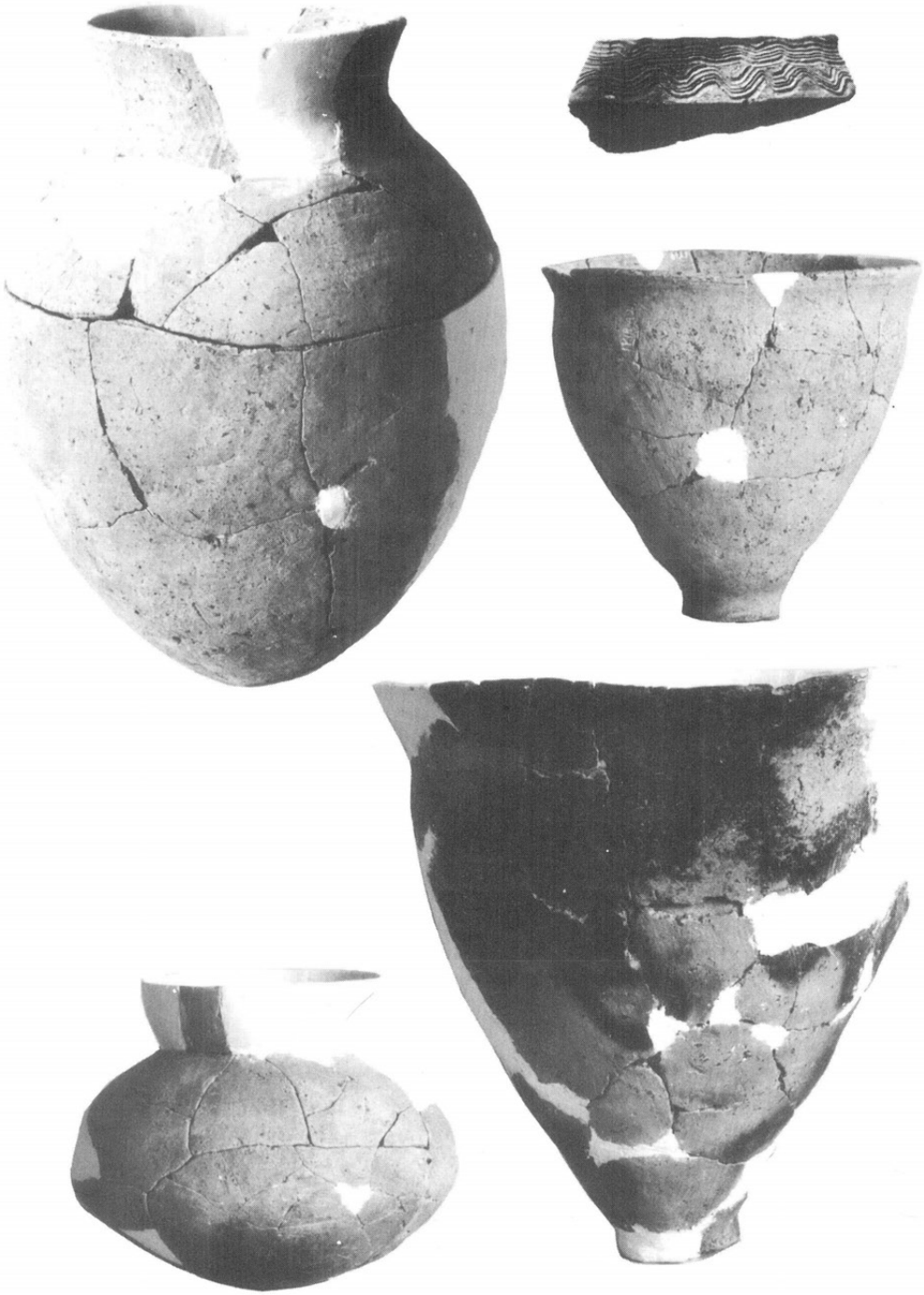
第７号竪穴住居跡出土遺物



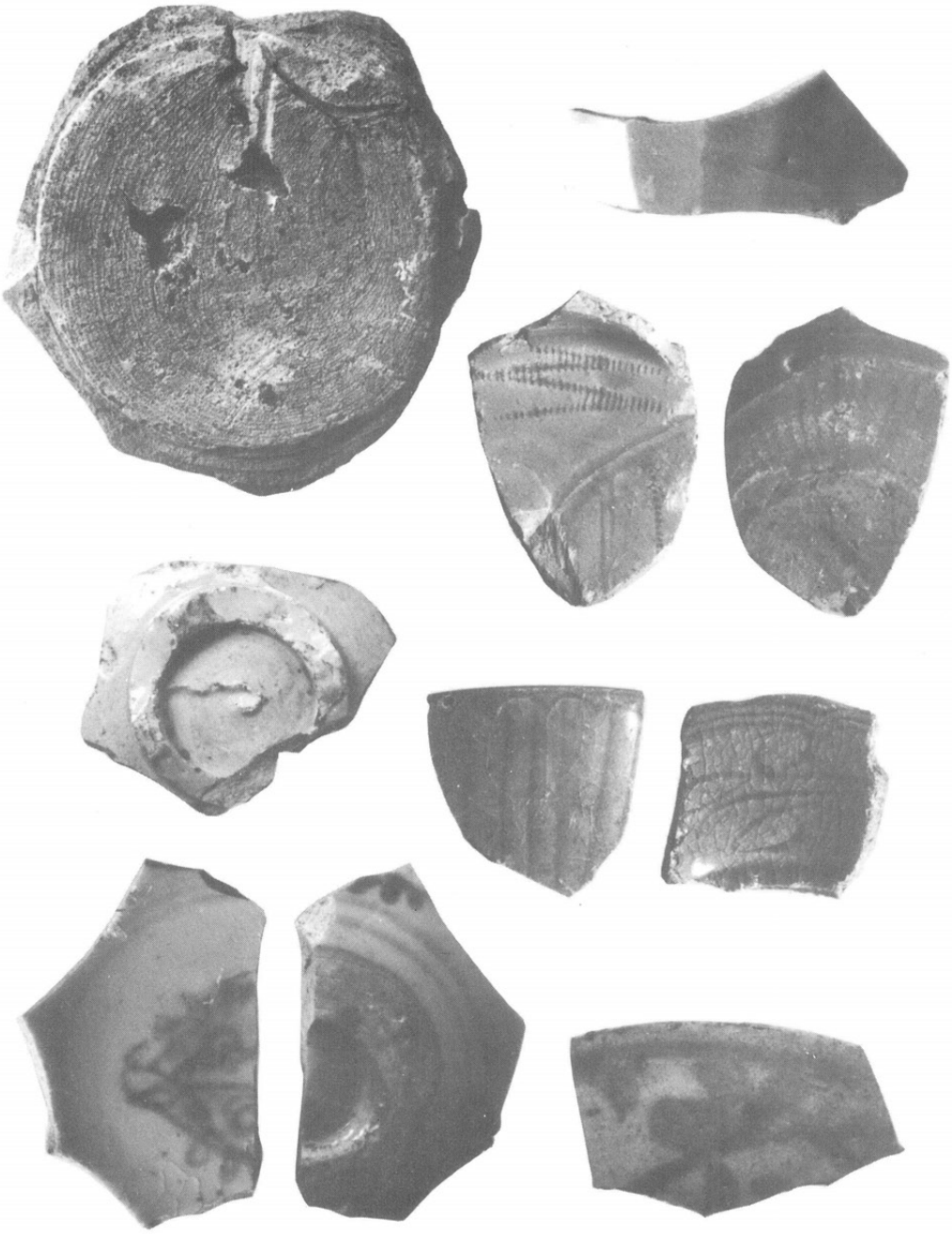
第10号竪穴住居跡出土遺物



第1・11号竪穴住居跡出土遺物



第12号竪穴住居跡出土遺物



祝吉遺跡出土中世遺物

都城市文化財調査報告書
第 2 集

祝　吉　遺　跡

発行　昭和57年３月31日
　　都城市教育委員会
印刷　（有）あべ全印刷